

有価証券報告書

事業年度 自 2018年2月1日
(第41期) 至 2019年1月31日

株式会社トリケミカル研究所

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第41期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	4
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	7
第2 【事業の状況】	8
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	8
2 【事業等のリスク】	9
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	13
4 【経営上の重要な契約等】	16
5 【研究開発活動】	17
第3 【設備の状況】	18
1 【設備投資等の概要】	18
2 【主要な設備の状況】	18
3 【設備の新設、除却等の計画】	18
第4 【提出会社の状況】	19
1 【株式等の状況】	19
2 【自己株式の取得等の状況】	21
3 【配当政策】	22
4 【株価の推移】	23
5 【役員の状況】	24
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	26
第5 【経理の状況】	32
2 【財務諸表等】	54
第6 【提出会社の株式事務の概要】	64
第7 【提出会社の参考情報】	65
1 【提出会社の親会社等の情報】	65
2 【その他の参考情報】	65
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	66

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年4月26日

【事業年度】 第41期(自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)

【会社名】 株式会社トリケミカル研究所

【英訳名】 Tri Chemical Laboratories Inc.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 太 附 聖

【本店の所在の場所】 山梨県上野原市上野原8154番地217

【電話番号】 0554-63-6600

【事務連絡者氏名】 専務取締役 菅 原 久 勝

【最寄りの連絡場所】 山梨県上野原市上野原8154番地217

【電話番号】 0554-63-6600

【事務連絡者氏名】 専務取締役 菅 原 久 勝

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第37期	第38期	第39期	第40期	第41期
決算年月	2015年1月	2016年1月	2017年1月	2018年1月	2019年1月
売上高 (千円)	—	—	—	—	7,792,295
経常利益 (千円)	—	—	—	—	2,931,680
親会社株主に帰属する 当期純利益 (千円)	—	—	—	—	2,267,222
包括利益 (千円)	—	—	—	—	2,173,166
純資産額 (千円)	—	—	—	—	7,025,785
総資産額 (千円)	—	—	—	—	11,112,931
1株当たり純資産額 (円)	—	—	—	—	899.37
1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	290.23
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	—	—	—	—	63.2
自己資本利益率 (%)	—	—	—	—	37.7
株価収益率 (倍)	—	—	—	—	16.1
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	—	—	—	—	1,411,291
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	—	—	—	—	△1,244,626
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	—	—	—	—	269,826
現金及び現金同等物 の期末残高 (千円)	—	—	—	—	1,595,747
従業員数 〔ほか、平均臨時雇用者 数〕 (名)	— 〔—〕	— 〔—〕	— 〔—〕	— 〔—〕	148 〔18〕

(注) 1 第41期より連結財務諸表を作成しているため、それ以前については記載しておりません。

2 売上高には、消費税等は含まれておりません。

3 従業員数は、就業人員であり従業員数欄の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。

4 第41期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第37期	第38期	第39期	第40期	第41期
決算年月	2015年1月	2016年1月	2017年1月	2018年1月	2019年1月
売上高 (千円)	4,103,274	4,956,758	5,469,985	6,445,728	7,793,177
経常利益 (千円)	426,089	693,539	975,492	1,622,799	2,087,857
当期純利益 (千円)	360,671	473,220	767,305	1,145,658	1,473,460
持分法を適用した場合の投資損失(△) (千円)	—	—	—	△108,193	—
資本金 (千円)	783,872	805,392	808,912	808,912	808,912
発行済株式総数 (株)	7,578,160	7,780,160	7,812,160	7,812,160	7,812,160
純資産額 (千円)	2,911,264	3,375,239	4,071,154	5,089,254	6,390,464
総資産額 (千円)	5,245,019	5,991,684	7,055,179	9,032,275	10,419,383
1株当たり純資産額 (円)	384.17	433.83	521.14	651.47	818.05
1株当たり配当額(内、1株当たり中間配当額) (円)	7 (—)	10 (—)	16 (—)	21 (—)	45 (—)
1株当たり当期純利益 (円)	49.45	61.77	98.30	146.65	188.62
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	48.01	60.88	—	—	—
自己資本比率 (%)	55.5	56.3	57.7	56.3	61.3
自己資本利益率 (%)	13.3	15.1	20.6	25.0	25.7
株価収益率 (倍)	12.1	8.8	25.1	34.1	24.7
配当性向 (%)	14.2	16.2	16.3	14.3	23.9
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	369,828	504,927	1,483,868	1,135,242	—
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△339,924	△610,460	△1,009,276	△1,536,384	—
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	358,263	146,414	190,226	38,732	—
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	792,195	830,886	1,495,821	1,134,240	—
従業員数 〔ほか、平均臨時雇用者数〕 (名)	110 〔11〕	121 〔13〕	130 〔16〕	134 〔18〕	138 〔18〕

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 第39期から第41期までの潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 従業員数は、就業人員であり従業員数欄の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。

4 第39期以前の持分法を適用した場合の投資利益については、関連会社の損益等からみて重要性が乏しいため記載しておりません。

5 第41期より連結財務諸表を作成しているため、第41期の持分法を適用した場合の投資利益、営業活動によるキャッシュ・フロー、投資活動によるキャッシュ・フロー、財務活動によるキャッシュ・フロー及び現金及び現金同等物の期末残高は記載しておりません。

2 【沿革】

年 月	概 要
1978年12月	無機化学工業製品の製造・精製・販売を目的として神奈川県相模原市(現神奈川県相模原市中央区)に(株)トリケミカル研究所(資本金2,500千円)を設立
1979年12月	光ファイバー用原材料における水分(OH基)の除去に成功、供給を開始
1982年8月	光ファイバー用硼素原材料としての三塩化硼素の合成に成功、供給を開始
1983年2月	三塩化硼素の量産化に成功、半導体用エッチング材料として半導体業界への供給を開始
1984年3月	本社工場を神奈川県愛甲郡愛川町に移転
1984年9月	化合物半導体材料としての高純度三塩化砒素の供給を開始
1994年1月	東京都江東区(後に東京都港区に移転)に臭化水素製造の目的でテイサン(株)(現日本エア・リキード(株))との合弁で関連会社(株)エッチ・ビー・アールを設立
1994年11月	本社工場を山梨県北都留郡上野原町(現山梨県上野原市)に移転
2000年10月	本社工場にて「ISO9001」を取得
2004年12月	台湾新竹縣竹北市に台湾支店を開設
2007年8月	(株)大阪証券取引所 ニッポン・ニュー・マーケット「ヘラクレス」に上場
2008年7月	本社工場にて「ISO14001」を取得
2008年11月	山梨県上野原市に上野原第二工場を建設
2010年10月	大阪証券取引所ヘラクレス市場、同取引所JASDAQ市場及び同取引所NEO市場の各市場の統合に伴い、大阪証券取引所JASDAQ(スタンダード)に株式を上場
2011年6月	上野原第二工場にて「ISO14001」を取得
2011年11月	上野原第二工場にて「ISO9001」を取得
2013年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の現物市場の統合に伴い、東京証券取引所JASDAQ(スタンダード)に株式を上場
2013年12月	大韓民国城南市(後に水原市に移転)に韓国事務所を開設
2016年7月	大韓民国世宗特別自治市に同国における半導体用次世代材料の開発、製造及び販売の目的で、SK Materials Co., Ltd.との合弁で関連会社SK Tri Chem Co., Ltd.を設立
2017年3月	台湾新竹縣竹北市に100%子会社の三化電子材料股份有限公司を設立
2018年1月	東京証券取引所市場第一部へ市場変更

3 【事業の内容】

当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであります。

当社グループは、当社、連結子会社(三化電子材料股份有限公司)、持分法適用関連会社(SK Tri Chem Co., Ltd.及び(株)エッチ・ビー・アール)の4社で構成されております。

連結子会社三化電子材料股份有限公司は、台湾での高純度化学化合物の開発・製造・販売を行うことを目的として設立された会社であります。

関連会社SK Tri Chem Co., Ltd.はSK Materials Co., Ltd.との合弁で設立された会社であり、韓国における高純度化学薬品の開発・製造・販売を行っております。

関連会社(株)エッチ・ビー・アールはテイサン(株)(現日本エア・リキード(株))との合弁で設立された会社であり、当社グループの主力製品であります臭化水素の製造・販売を行っております。

当社と連結子会社、及び関連会社2社は相互に連携を保ちながら、主として半導体メーカー向けの高純度化学薬品の開発・製造・販売を行っております。

半導体デバイス製造においては、シリコンのウェハ(注1)上に複雑な電子回路を構成するため、多様な工程を経て作られております。この工程はウェハプロセスと呼ばれておりますが、その中の様々な場面で、化学反応を利用した加工がなされており、当社グループの製品は主にウェハの表面上に薄膜を化学反応を用いて堆積させる「CVD」、薄膜の不必要な部分を腐食させて削り取る「エッチング」、ウェハ上にトランジスタ(注2)やダイオード(注3)等を作るためにウェハの内部に不純物を注入させる「拡散」といった多岐にわたる工程において用いられております。

また、これらに供される材料は、半導体デバイスの微細化に伴い、製造プロセス変更や材料の持つ特性の限界、化学物質を取り巻く法規制の強化等の要因により、それまで使用されていた材料から新しい材料への変遷が行われることもあります。当社グループは、この材料変更の要求に対し、材料工学・応用化学の観点から常に新しい材料の開発・提案を行い新材料の供給を行っております。

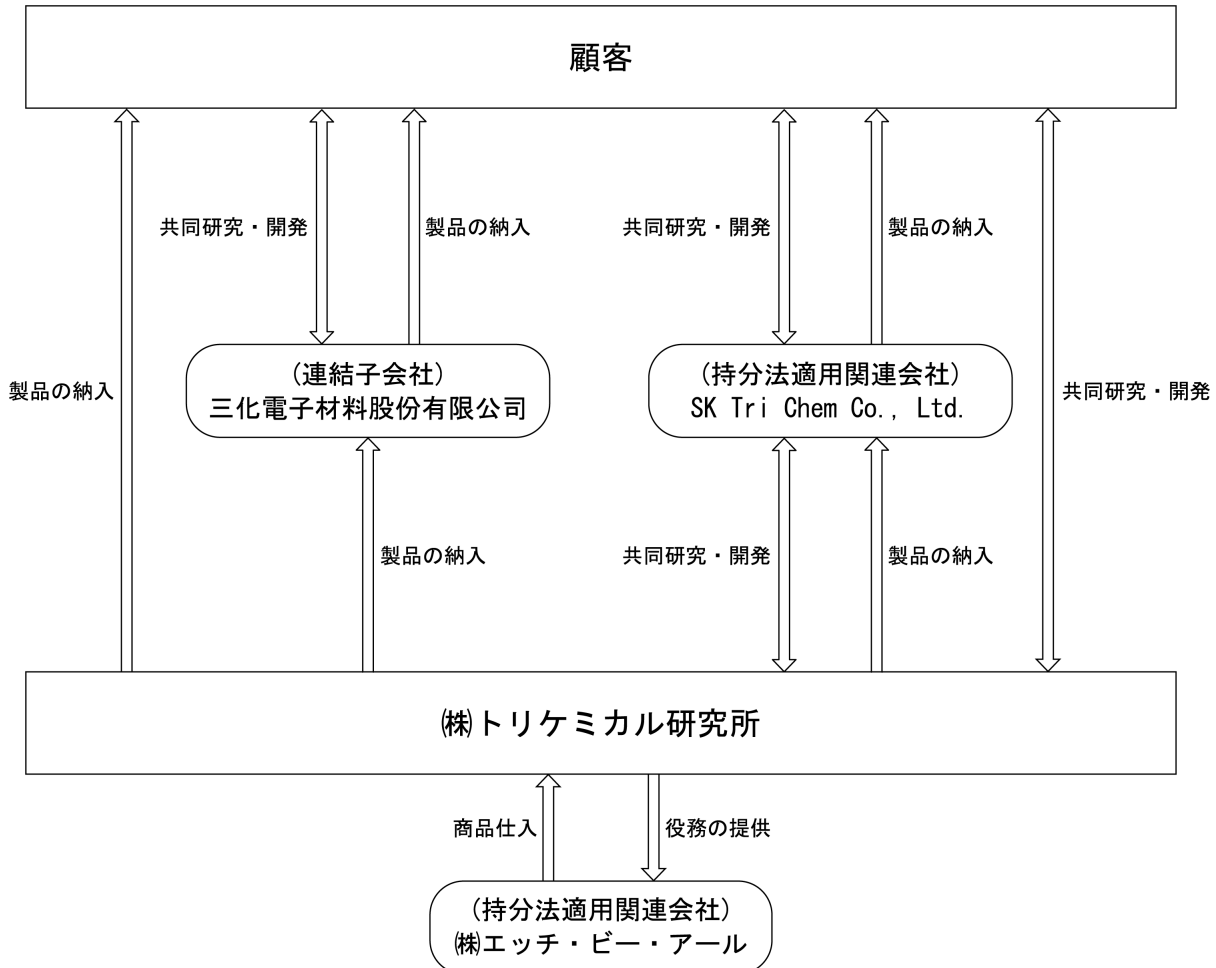
設立当初は光ファイバー製造に供される高純度材料の供給を行うことで成長を遂げてまいりましたが、現在では同様な材料を使用し、ニーズの変化が常にかかる半導体製造用材料や、デバイスの原理的に半導体と共通点の多い太陽電池製造用材料の供給が主力となっております。また、高純度材料や新規化学材料の試作依頼など開発に供される材料の開発・販売も同様に事業の一部となっております。

(注) 1：ICチップの製造に使われる半導体でできた薄い基板。シリコン製のものが多く、これを特に「シリコンウェハ」と呼びます。

2：増幅機能を持った半導体素子であります。

3：片方向にのみ電流を流す性質を持った半導体素子であります。

事業系統図は、次のとおりであります。



製品事業

当社グループが、開発・製造・販売している主な半導体・太陽電池向け製品は、主に以下の3種類であり、また、製品製造・開発の過程において、当社グループの得意とする以下の4つの作業を付加することにより製品の高付加価値化を図り、他社との差別化を図ります。

<製品種類>

- ① CVD材料
- ② ドライエッチング材料
- ③ 拡散材料

<付加作業の種類>

- ① 化学薬品用容器の設計販売（化学関連法規などをクリアーした化学薬品輸送用タンクの設計及び販売）
- ② 化学薬品の受託合成（新規薬品の受託合成）
- ③ 受託実験（共同開発高純度化学薬品の開発並びに薬品を用いたCVDに関わる受託実験）
- ④ その他付帯サービス（化学薬品の物性調査や分析などのサービス）

①CVD材料

CVD（Chemical Vapor Deposition:化学気相成長）法とは、化学材料の蒸気を熱などにより分解しウェハ上に堆積させる技術であり、CVD材料とはその際に用いられる化学材料を指します。堆積させる薄い膜は絶縁膜や金属・導体膜・半導体膜であり、使用される材料は多岐にわたっております。

また、半導体の微細化・高性能化を進めるために、従来の製法・材料では解決できない電気的な問題を解決するための誘電率の低い膜が得られる（low-k）材料や逆に誘電率の高い膜が得られる（high-k）材料・物理的な問題を解決するための金属窒化膜材料などといった新たなニーズに対応するための材料をいち早く提案し、安定供給するのが当社グループの特長であります。

②ドライエッチング材料

主に腐食による化学反応により、CVD法で堆積させた膜等の不要な部分を削り取り、ウェハ表面を凹凸に加工する技術であります。このプロセスに供される材料は、従前は特定フロン(注)に代表される材料を使用しておりましたが、環境問題や半導体の微細化により変わりつつあります。微細化が進むとCVD法等で使用される薄膜の材料も変更されることから、ドライエッチングに使用される化学材料も変更されます。当社グループの主力製品の1つである臭化水素（化学式：HBr）は環境問題・微細化といった問題をクリアーする材料であり、その需要は増大しております。

(注)：オゾン層保護のため国際条約により規制の対象となっているフロン。

③拡散材料

ウェハ上などにトランジスタを形成する際、不純物を注入する技術があります。イオン打ち込み法(注1)と熱拡散法(注2)の2種類がありますが、いずれも不純物を注入するという点では同様であります。

ここで使用される材料は、周期律表のIV族(注3)元素であるシリコンの持つ性質を変えることが求められるため、性質の異なる不純物である必要があります。具体的にひとつはIII族(注3)の元素であるホウ素・ガリウム・インジウムなどで、もうひとつはV族(注3)の元素であるリン・ヒ素・アンチモンなどであります。

また、光ファイバーでも同様に光の拡散を制御する目的でゲルマニウムに代表される不純物を使用しております。

当社グループでは、これらに関わる材料を多様にラインナップするとともに、材料の性質や顧客の細かな要求に対応した容器に封入し出荷しております。また、既存製品の単なる販売にとどまらず、新規化学薬品の受託合成や、当社グループの製品を顧客が実際に使用する条件下で性質・性能等の評価を行う各種受託実験も行っており、これが当社グループの大きな特長となっております。

(注)1：原子をイオン化して加速し、固体中に打ち込む方法。

2：熱的な方法で原子を固体中に注入する方法。

3：元素の周期律表の縦列に並ぶものは概ね性質が類似しており、I～VIIIまでの族に分類されます。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有 〔被所有〕 割合(%)	関係内容
(連結子会社) 三化電子材料股份有限公司 (注)	台湾 新竹縣竹北市	百万台湾 ドル 100	台湾における高純度化学薬品の開発・製造及び販売	100.0	当社よりの役務の提供及び製品の販売 役員の兼任 4名
(持分法適用関連会社) SK Tri Chem Co., Ltd.	大韓民国 世宗特別自治市	百万韓国 ウォン 25,000	韓国における高純度化学薬品の開発・製造及び販売	35.0	当社よりの役務の提供及び製品の販売、SK Materials Co., Ltd. との合弁で設立 役員の兼任 2名
(持分法適用関連会社) ㈱エッチ・ビー・アール	東京都港区	百万円 30	臭化水素の製造・販売	49.0	当社グループの主力商品である臭化水素の製造、当社よりの役務の提供、テイサン㈱(現日本エア・リキード㈱)との合弁で設立 役員の兼任 2名

(注) 特定子会社であります。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年1月31日現在

従業員数(名)	148 〔18〕
---------	-------------

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
2 従業員数欄の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
3 当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、セグメント別の従業員の記載を省略しております。

(2) 提出会社の状況

2019年1月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
138〔18〕	35.3	10.0	7,424

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
2 従業員数欄の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
3 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
4 当社の事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、セグメント別の従業員の記載を省略しております。

(3) 労働組合の状況

当社グループには労働組合はありません。

なお、労使関係については円滑な関係にあり、特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社は、1978年12月の設立以来、「科学技術を通じて最先端テクノロジーの発展に貢献し、人々にゆとり創造を実現する」の社訓の下、その実践のため以下の内容を経営理念として掲げ、役職員一丸となって取り組んでおります。

- ① 当社は、開発力の向上及び生産技術の改善に取り組み、顧客により良い製品及び技術を提供することで顧客満足の最大化を目指してまいります。
- ② 当社は、持続した健全性・成長性を兼ね備えた事業に取り組み、企業価値の最大化に努めてまいります。
- ③ 最先端・高純度化学材料の開発・製造・販売を事業としている当社は、「化学物質が環境に与える影響の大きさ」を正しく認識し、顧客・社員の安全性向上や健康増進を常に念頭に置き、かつ、「環境保全活動への取り組み」を経営の最重要課題の一つと位置づけ、事業活動を行うことといたします。
- ④ 当社は、従業員ひとりひとりが高い誇りと責任感をもって働くことの出来る公正かつ開かれた企業風土を目指してまいります。

(2) 目標とする経営指標

当社グループは、安定した売上成長を図り、規模の拡大を目指しながらも、経営の効率化を推し進めることで確実に利益をあげられる強靱な企業体質の構築に努めてまいりたいと考えております。そのため売上高及び売上高営業利益率を重視すべき経営指標とし、第42期（2020年1月期）を初年度とする中期経営計画においては、3年間で売上を約39%増加させるとともに、営業利益率は25%超の水準を維持することを目標としております。

(3) 経営環境及び対処すべき課題

当社グループの主要な販売先であります半導体業界におきましては、各種データ量の増加や、AIや車載等に向けた用途の拡大を受け、2019年の前半は若干の生産調整局面を迎える可能性はありますが、年の後半にかけてはアジア諸国を中心として徐々に底堅い動きを回復するものと見込まれており、また、半導体の高性能化による製造プロセスの変更や、それに伴う新規化学材料の開発及び市場への投入が継続して求められる環境下にあると認識しております。

そのような中、当社グループは中長期的な成長・拡大路線の維持、また、厳しい経営環境下においても耐えうる市場競争力の維持に向けて中期経営計画を策定し、以下の事項を経営戦略の基本方針とした事業展開を行うことにより、継続的成長の達成を目指すとともに企業価値の最大化に努めてまいります。

まず、開発・製造部門と販売部門、品質管理部門との連携をより深め、業務改革を推進してまいります。

さらに、優秀な人材の確保と教育や新規の設備投資、改良を推し進めることで、生産能力や効率の向上のみならず、超高純度・高付加価値のウルトラファインケミカルサプライヤーとして、安全・品質管理面においても積極的に設備強化・体質改善を図り、さらなる業容の拡充に努めてまいります。

また、台湾子会社における新工場の立ち上げを当社グループのグローバル戦略の最重要課題のひとつと位置付け、早期の事業化を目指してまいります。

次に、販売面におきましては、子会社・関係会社等グループ全体でのシナジーを強化し、海外、特に台湾や韓国に向けた新規商権の獲得を目指し、事業の効率化や、安定した拡大成長路線の継続を図ってまいります。

また、継続的な海外進出や設備増強等を可能とすべく、財務体質の健全化を推し進め、強固な経営基盤の構築に努めてまいります。

最後に、コーポレートガバナンス体制をより一層強化し、経営の透明性と効率性を高めることで、企業価値の向上に努めてまいります。

2 【事業等のリスク】

以下において、当社グループの事業展開上のリスク要因となる可能性があると考えられる事項を記載しております。また、当社グループとしては必ずしも事業上のリスクとは考えていない事項についても、投資判断、あるいは当社グループの事業内容を理解する上で重要と考えられる事項については、投資者に対する積極的な情報開示の観点から記載しております。なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 特定の業界に依存していることについて

① 半導体業界への依存について

当連結会計年度の売上高は半導体市場向けが高い割合を占めており、半導体業界の動向に大きく影響される傾向にあります。当連結会計年度において、日本、台湾、韓国の大手半導体デバイスメーカー向け売上高が50%超(ディーラー経由での販売も含む)を占めており、これらのメーカーの生産動向が当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

また、半導体製造前工程のCVD工程及びエッチング工程を得意とする当社グループは、シリコンウェハの生産動向に特に大きく影響を受ける傾向にあります。

当社グループでは、そうしたリスクを防止あるいは分散するため、半導体市場のうち、刻々と変化する先端開発分野における変化を先取りするとともに、市況サイクルの異なる国内市場と海外市場のバランスを取りつつ、他方、これまでの半導体業界依存の軽減のため、新規分野に向けた材料の開発等にも注力し対処していく所存であります。

しかしながら、今後市況が大きく変化し、縮小傾向に転じた場合、又は業界の技術革新に当社グループが追随出来ない場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

② 特定の製品への依存について

当連結会計年度における当社グループの売上高については、半導体向け材料の中でも、特に高誘電率絶縁膜材料といわれる分野への依存度が高くなっております。当分野の売上が減少した場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与えるおそれがあります。

③ 競合の状況について

当社グループは、最先端の半導体に用いられる高純度の化学材料において、技術的な優位性やノウハウを保持していることや、ニッチな市場であることから、現状、競争相手となる企業は少ないものと考えております。

しかしながら、今後、新規に当社グループと競合する分野、製品に他企業が参入した場合、競争の激化によって当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

④ 原材料の市況変動について

当社グループの製品は、その原料に市況変動に左右される化学薬品や金属材料を多く使用し、他方、金属容器については、同様に市況変動に左右されるステンレス材料を使用しております。当社グループでは、市況変動に大きく左右されないよう市況価格に鑑みながら取引先との価格交渉にあっておりますが、今後市況価格の暴騰があった場合には、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

(2) 事業遂行上のリスクについて

① 財務の状況

当社グループが販売している高純度化学材料は、主に最先端の半導体に用いられているため、極めて高い純度や特性が要求されており、これらの要求に応えられる高純度化学材料を開発するために多額の研究開発費が先行して発生することや、高純度の化学材料を生産するための製造設備等を設けることなどから、事業を遂行する上では、多額の資金が必要となっております。当社グループは、必要な資金の多くを主に金融機関からの借入金で調達していることから、有利子負債への依存度が高くなっており、当連結会計年度末現在における当社グループの総資産に占める有利子負債の割合は24.3%となっております。

当社グループとしては、販売体制の強化、生産の効率化及び全社的な合理化施策等の推進によって利益の増大を図り、有利子負債への依存度を低下させる方針であります。

しかしながら、現状の有利子負債依存度の状態で借入金利率が上昇した場合、支払利息の増加により当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

② 為替変動リスクについて

当社グループは、製品等の輸出及び原材料等の輸入において外貨建取引を行っております。当連結会計年度における売上高に占める海外ユーザー向けの売上高は、概ね60%となっており、その一部は外貨建の決済条件となっていることから、為替変動があった場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

また、海外関係会社の業績、資産及び負債につきましては、現地通貨で発生したものは円換算したうえで連結財務諸表を作成しておりますが、当該現地通貨の為替変動があった場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

③ 品質管理について

当社グループは、ISO9001品質マネジメントシステムの採用で、社内生産に関しては当然のこと、主たる協力会社にも同様の体制整備を要請しながら、総合的な品質保証体制と継続的な改良・改善体制の運用に努めてまいりました。そのことにより、不良品発生を低減に注力しておりますが、クレーム発生の可能性は皆無ではありません。また、製造物賠償に関してはPL保険に加入しており、現時点におきましては、企業の存続やユーザーの事業継続を脅かすような甚大なクレームや製造物責任につながる事態は考えられません。しかしながら、万一そうした事態が発生した場合には、クレームに対する補償、対策が製造原価の上昇を招き、当社グループのブランドの評価、財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

④ 人材の確保について

当社グループは刻々変化する市場環境に対応して、常時、高度な研究開発を継続していく必要があり、そのため優秀な人材の確保と維持は事業展開上非常に重要な事項となっております。そのため、当社グループが必要とする人材の獲得に困難が発生したり、あるいは当社グループの人材が社外に流出した場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

⑤ 顧客情報の漏洩及び技術ノウハウの流出について

当社グループは、半導体メーカーの最先端の半導体に係る製造工程や材料の特性等の情報を知った上で、高純度の化学材料の開発、提案を行っております。従って、当社グループの従業員が事業上知り得た顧客の技術情報を外部に漏洩した場合、当社グループの信用の失墜による取引関係の悪化や、技術情報の漏洩による損害に対する賠償を請求されることなどにより、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

また、当社グループが製造する高純度化学材料は、創業以来蓄積してきた高純度化や安定生産に係るノウハウが重要な要素となっており、当社グループが保有する高純度化のノウハウ等に係る情報が、何らかの形で社外に流出した場合、技術的な優位性を維持できなくなることにより、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

⑥ 仕入先への高い依存度について

当社グループでは高純度化学材料を充填するための容器を外部からの仕入により調達しておりますが、そのうち、当社グループの販売先である半導体メーカー等の半導体製造装置に合わせた特殊仕様の容器については、主に(株)下山工業から仕入れており、同社との取引関係が何らかの理由により解消となった場合、一時的に当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

また、高誘電率絶縁膜材料を含む、当社グループの販売する複数の主要製品の合成に用いられる有機リチウム化合物の大半を、アジアリチウム(株)から仕入れております。当社グループは安定的に原材料を調達するため、複数仕入先を確保すること及び適切な在庫を保有することに努めておりますが、供給不足、納入の遅延や仕入額の高騰等の問題が発生した場合、当社グループの生産活動の停止等により、財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

⑦ 販売先への高い依存度について

当社グループでは高純度化学材料を半導体メーカー等に納入する際に、各ガスディーラーの拠点や販売網を利用し、輸送や納品を行っておりますが、当連結会計年度におきましては販売先の一つである日本エア・リキード㈱との取引は、同社を通じたルートでの最終ユーザーの稼働が好調であったことから、当社グループの連結売上高の40.0%を占めております。

当社グループの業績が同社の動向に直接左右されることはありませんが、同社との取引関係が何らかの理由により解消になった場合、あるいは同社への販売量が減少した場合、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

⑧ カントリーリスクについて

当社グループは台湾で子会社、韓国で合弁会社を有しており、台湾と韓国の最終ユーザー向け販売の増加が今後の成長要因と考えております。

しかしながら、上記両地域において、法律や規制の変更、テロ・戦争・その他の要因による社会的混乱等が生じた場合、当社グループの事業活動に支障が生じ、財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

⑨ 関係会社の業績変動について

当社グループは、当社と連結子会社1社、関連会社2社で構成されております。事業の遂行が順調に進まない場合や、予期せぬ事象等により、これら関係会社の業績に大きな変動が生じた場合、財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(3) 研究開発について

当社グループは、既存製品の改良や新規製品の研究開発等により、研究開発費、それに関連する設備投資が先行して発生しております。そうしたリスクを防止あるいは分散するため、研究開発段階でのマーケティングに注力してリスクを分散するとともに、研究開発プロジェクト管理の徹底を図り、他企業との提携を積極的に推進しております。

しかしながら、多大な研究開発費や設備投資費用を投入したにもかかわらず、製品開発等が軌道に乗らなかった場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(4) 法的規制等について

当社グループの製造する製品には、毒物・劇物が含まれ、またそれらの製品を製造する際に使用する材料にも毒物・劇物が含まれております。また、当社グループは国内での営業取引のみならず、外国企業との輸出入取引を行なっている関係上、日本及び諸外国の法令等による諸規制を受けております。それらの製品及び材料取扱を規制する法律・法令等の主なものとしては、「毒物及び劇物取締法」、「消防法」、「高圧ガス保安法」、「土壤汚染対策法」、「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」、「化学兵器の禁止及び特定物質の規制等に関する法律」などがあります。

当社グループでは、国内外の法令等の遵守並びに運用状況・改訂動向に関する情報収集に努めており、また、当社におきましてはISO14001環境マネジメントシステムにより、周辺環境への配慮を行っていることで、現在のところ主要な事業活動の前提となる事項についてその継続に支障を来す要因は発生しておりませんが、現在又は将来の法律及び諸規制を遵守できなかった場合には、当社グループが債務を負ったり、免許・届出・認可等の取り消しや一定期間の停止を含む罰則の適用を受けたり、事業の中断を含む公的命令を受けたり、その後の事業の継続に障害となる信用の低下を被ったりすること等により、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(主な許認可の状況)

許認可等の名称	有効期限	規制法令	法令違反の要件及び主な許認可取消事由
危険物設備の設置許可 (製造所及び貯蔵所)	なし	消防法	許可なく製造所、貯蔵所又は取扱所の位置、構造又は設備を変更した場合、定める技術上の基準を満たしていない場合等には、製造所、貯蔵所または取扱所の許可を取り消し、または期間を定めて、その使用を停止させられる。 (消防法第12条第2項)
毒物劇物一般販売業登録	2021年12月20日	毒物及び劇物取締法	登録業者が、その有する設備を法令に定める基準に適合させるために監督官庁等から命じられた措置を取らない場合や、規制法令に違反した場合等には、毒物または劇物の販売業、製造業、輸入業の登録を取り消し、または期間を定めて、業務の全部若しくは一部を停止させられる。 (毒物及び劇物取締法第19条)
毒物劇物製造業登録	2019年12月20日		
毒物劇物輸入業登録	2020年7月9日		

また、将来において法的規制の強化等がなされ、その対応のための生産コスト等が増大した場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(5) 知的財産権等について

当社グループの事業分野に関する知的財産権については、特許権を取得しております。当該知的財産については、製品化に至る種々のノウハウと密接不可分の関係にあり、知的財産権を利用されることにより当社グループの業績が重大な影響を受ける可能性は少ないと考えております。しかしながら、万が一類似製品が登場した場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

他方、当社グループは第三者の知的財産権を侵害しないよう入念な事前調査を行っておりますが、当社グループの認識の範囲外のことで、これを侵害する可能性があり、これにより、当社グループが第三者と知的財産権をめぐる損害賠償、対価の支払あるいは使用差し止め等を請求され、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(6) 災害等について

当社グループの生産拠点である本社工場及び上野原第二工場は、山梨県上野原市の工業団地に集中しております。地震等の自然災害や火災等の事故によって、本社工場と上野原第二工場が同時に被害を受け、設備が壊滅的な損害を被る可能性があります。この場合は当社グループの操業が中断し、生産及び出荷が遅延することにより売上高が低下し、さらに生産拠点等の修復のために多額の費用を要することとなる場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の概要は次のとおりであります。

なお、当社グループは、当連結会計年度より連結財務諸表を作成しているため、前連結会計年度との比較・分析の記載はしておりません

① 財政状態及び経営成績の状況

イ. 財政状態の状況

(流動資産)

当連結会計年度末における流動資産の残高は、5,484,191千円となりました。その主な内訳は、受取手形及び売掛金1,808,824千円、現金及び預金1,595,747千円、電子記録債権1,042,313千円等であります。

(固定資産)

当連結会計年度末における固定資産の残高は、5,628,739千円となりました。その主な内訳は、有形固定資産3,944,024千円、投資有価証券1,595,054千円等であります。

(流動負債)

当連結会計年度末における流動負債の残高は、2,568,947千円となりました。その主な内訳は、1年内返済予定の長期借入金712,880千円、短期借入金580,000千円等であります。

(固定負債)

当連結会計年度末における固定負債の残高は1,518,198千円となりました。その主な内訳は、長期借入金1,377,839千円等であります。

(純資産)

当連結会計年度末における純資産の残高は、7,025,785千円となりました。その主な内訳は、利益剰余金5,550,282千円、資本金808,912千円等であります。

ロ. 経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、企業の設備投資の回復や、雇用情勢におきましても労働力の高い水準での需要は継続しており、合わせて個人消費も持ち直しの傾向がみられる状況にありました。

一方、世界経済に目を転じましても、米国の通商政策をめぐる、中国を中心とした各国との貿易摩擦の影響や、英国のEU離脱に伴う影響に対する先行きの懸念はいまだ払拭されてはおりませんが、各国の経済情勢は概ね堅調に推移し、国内からの輸出も高水準で推移いたしました。

当社グループの主要な販売先であります半導体業界におきましても、年の後半にかけて一部半導体製造メーカーで設備投資の先送り等はあったものの、WSTS (World Semiconductor Trade Statistics:世界半導体市場統計) が2018年11月に公表した2018年の半導体市場予測によると、市場全体ではドルベースで前年比15.9%の成長を継続すると予測されており、年間を通じて見れば、旺盛な半導体需要に支えられて高水準での生産を維持している状況にありました。

このような状況下、当社グループといたしましては、新工場棟の建設、生産及び研究設備の更なる導入を行い、生産体制の強化と効率化に努めるとともに、積極的な人材採用と教育体制強化に努め、全社的な技術レベルの向上を図ってまいりました。また、販売面につきましても、主力の日本と台湾に加え、関係会社を通じて韓国ユーザーへも新規半導体材料等を中心とした販路拡大に努めてまいりました。

一方、利益面に関しましては、競争力の確保と将来に向けた事業基盤の強化を図るため、全社を挙げての経費削減に継続して取り組むとともに、中期経営計画における経営方針に基づき、顧客からの高純度化ニーズ及び差別化への対応を推し進めることにより一層の収益向上を図ってまいりました。

その結果、売上高は7,792,295千円、営業利益は2,153,173千円となり、また、持分法による投資利益の計上等により経常利益は2,931,680千円、親会社株主に帰属する当期純利益は2,267,222千円となりました。

なお、当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、1,595,747千円となりました。

当連結会計年度末における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は1,411,291千円となりました。これは主に税金等調整前当期純利益の計上2,931,680千円、減価償却費483,929千円等のプラス要因が、持分法による投資利益826,688千円、法人税等の支払額576,065千円、売上債権の増加額486,526千円等のマイナス要因を上回ったことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果支出した資金は1,244,626千円となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出1,199,286千円等によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果得られた資金は269,826千円となりました。これは主に、長期借入金の収支のプラス438,062千円が配当金の支払額164,120千円等を上回ったことによるものであります。

③ 生産、受注及び販売の状況

当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであります。

イ. 生産実績

当社グループの生産・販売品目は広範囲かつ多種多様であり、同種の製品であっても、その容量、構造、形式、用途等は必ずしも様ではないことから、記載しておりません。

ロ. 受注状況

生産実績と同様の理由に加え、受注生産形態をとらない製品が多いことから、記載しておりません。

ハ. 販売実績

当連結会計年度における販売実績は次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(千円)	前年同期比(%)
高純度化学化合物事業	7,792,295	—

（注） 1 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	当連結会計年度	
	金額(千円)	割合(%)
日本エア・リキード(株)	3,115,432	40.0
TOPCO Scientific Co., Ltd.	1,774,432	22.8

2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

当社グループは、当連結会計年度より連結財務諸表を作成しているため、前連結会計年度との比較・分析の記載はしていません。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたって、当社の連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 5 会計方針に関する事項」に記載しております。この連結財務諸表の作成にあたっては、過去の実績や状況に応じ合理的と考えられる様々な要因に基づき見積り及び判断をおこなっておりますが、不確実性が内在しているため、将来生じる実際の結果と異なる可能性があります。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

イ. 経営成績の分析

(売上高)

当連結会計年度における売上高は、当社グループの主要な販売先であります半導体業界におきまして、需要が堅調に推移し、新規半導体材料等を中心とした販路拡大に努めてまいりました結果、7,792,295千円となりました。

(売上総利益)

当連結会計年度における売上総利益は、3,591,839千円となりました。売上総利益率は売上原価率が安定的に推移したこともあり、46.1%となりました。

(販売費及び一般管理費、営業利益)

当連結会計年度における販売費及び一般管理費は、研究開発費及び給与手当等の計上により1,438,666千円となりました。その結果、営業利益は2,153,173千円となりました。

(営業外損益、経常利益)

当連結会計年度における営業外収益は、持分法による投資利益である826,688千円が寄与したことにより、855,450千円となりました。

当連結会計年度における営業外費用は、76,942千円となりました。その結果、経常利益は2,931,680千円となりました。

(特別損益、税金等調整前当期純利益)

当連結会計年度における特別損益は、特別利益及び特別損失ともに計上がありませんでした。その結果、税金等調整前当期純利益は2,931,680千円となりました。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

当連結会計年度における法人税、住民税及び事業税に法人税等調整額を加えた税金費用は664,457千円となりました。その結果、親会社株主に帰属する当期純利益は2,267,222千円となりました。

ロ. 財政状態の分析

当社グループの財政状態の分析については、「第2 事業の状況 3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ①財政状態及び経営成績の状況 イ. 財政状態の状況」に記載しております。

ハ. 経営成績に重要な影響を与える要因

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因については、「第2 事業の状況 2. 事業等のリスク」に記載しております。

ニ. 資本の財源及び資金の流動性

当社グループの主な資金需要は事業に必要な運転資金や設備投資であり、資金については銀行等金融機関の借入によって調達する方針としております。なお、機動的かつ安定的な資金調達手段を確保することを目的として、2018年12月28日に取引銀行2行と総額3,000,000千円のシンジケートローン契約を締結しております。

当連結会計年度におけるキャッシュ・フローの状況につきましては、「第2 事業の状況 3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ②キャッシュ・フローの状況」に記載しております。

なお、重要な設備の新設等の計画については、「第3 設備の状況 3 設備の新設、除却等の計画」に記載しております。

ホ. 経営方針・経営戦略・経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループでは、最新の外部、内部環境を反映させた、今後の3年間の中期経営計画（毎年見直すローリング方式）を策定し、事業に取り組んでおります。2019年1月期の計画値と実績値の結果は以下のとおりとなり、売上高、各利益とも計画を上回りました。

	2019年1月期計画	2019年1月期実績	計画比
売上高 (百万円)	7,490	7,792	+302
営業利益 (百万円)	1,910	2,153	+243
経常利益 (百万円)	1,940	2,931	+991
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,330	2,267	+937
売上高営業利益率 (%)	25.5	27.6	+2.1

この主な要因としては、当社グループの主要な販売先である半導体業界におきまして、最先端の半導体に向けた新規材料の需要が引き続き好調に推移したこと、韓国関係会社SK Tri Chem Co., Ltd. の業績が当初の想定以上に好調に推移したことによる持分法投資利益の計上等が挙げられます。

当社グループでは、安定した売上成長を図り、規模の拡大を目指しながらも、経営の効率化を推し進めることで確実に利益をあげられる強靱な企業体質の構築に努めてまいりたいと考えていることから、特に、売上高及び売上高営業利益率を重視すべき経営指標としております。なお、売上高営業利益率に関しては25%超の水準を維持することを目標としております。

4 【経営上の重要な契約等】

(1) 合弁契約

契約締結先	内容	出資額(出資比率%)	合弁会社名	設立年月
SK Materials Co., Ltd.	韓国における高純度化学薬品の開発、製造、販売に関する合弁契約	当社 百万韓国ウォン 8,750 (35) SK Materials Co., Ltd. 百万韓国ウォン 16,250 (65)	SK Tri Chem Co., Ltd.	2016年7月

(2) 借入に関する契約

当社は、今後の事業展開における資金需要に対し、機動的かつ安定的な資金調達手段を確保することを目的として、取引銀行2行とシンジケーション方式のコミットメント期間付タームローン契約を締結しております。

契約形態	コミットメント期間付タームローン
組成金額	30億円
契約締結日	2018年12月28日
コミットメント期間	2019年2月1日～2022年1月31日
アレンジャー兼エージェント	(株)三菱UFJ銀行
コ・アレンジャー	(株)山梨中央銀行
参加金融機関	(株)三菱UFJ銀行、(株)山梨中央銀行

5 【研究開発活動】

当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントでありま
す。

当連結会計年度の研究開発活動は、基本的に従来のテーマを踏襲しつつ、顧客のニーズや新規案件にも柔軟に対応
することを目標に掲げております。

当社グループの研究開発は、当社開発部を中心として、生産技術部及び製造部等とも連携を取りながら活動を進め
ることにより、迅速かつ効率的に結果を出すことができる体制を構築しております。

当連結会計年度における当社グループが支出した研究開発費の総額は408,913千円であります。

なお、テーマ別の研究開発活動は次のとおりであります。

(1) 半導体向け材料の開発

半導体の進歩に伴い、使用される材料や技術も日々進化し続けております。当社グループでは今後ますます高度
化する顧客の要求事項に対し、他社に先駆けていち早く最先端材料の市場への投入や新規技術に対応すべく、さら
に活発な研究活動を続けてまいります。また、独自開発のみならず、デバイスメーカー、装置メーカーの研究所や
大学等と共同での材料開発も随時進めており、その結果の一部につきましては学会等で発表しております。

(2) エネルギー分野向け材料の開発

当社グループでは創業以来、半導体・光ファイバー向け材料等、最先端産業向けに高純度化学材料を扱ってまい
りました。これらのノウハウを活用し、エネルギー分野に向けましても新規材料の開発を進めております。既に一
部ご採用頂いている製品もあり、今後更なる展開に向けて製品開発を進めてまいります。

(3) 化学薬品周辺機器の開発

半導体製造において要求されるレベルの高純度化学材料は、その性質上、デリバリーや供給設備について、安全
性及び品質を保持しながらハンドリングするための技術・ノウハウが不可欠であります。当社グループでは創業以
来蓄積してきたそれらの知見を活用し、個別のニーズに応じた特殊容器の開発や液面レベルセンサー等の容器に付
随する周辺機器の開発等を行っており、外部に供給しております。

また、要求される品質レベルは絶えず進化していますが、それに対応すべく要素技術の開発にも注力しておりま
す。確立した技術は、積極的に社内設備にも応用しており、より一層の作業の安全確保と、製造ラインにおける業
務の効率化・省力化による製造原価の低減を図っております。

(4) 新規開発品の量産化対応

商品の新規開発におきましては、その後の品質・供給量・価格等における要求に対応することなく、顧客に広く
浸透することはあり得ません。これら顧客の量産化ニーズに迅速に対応するため、今までにも増して新規開発品の
急速な製品化・スケールアップ等が必要となっております。

当社グループはこれらの要求に対し、品質・数量両面での安定供給を図るため、今後とも顧客からのニーズにこ
だわった開発をモットーとして、初期開発品からの量産スケールまでの工程最適化の研究・開発を継続し、開発部
門から製造部門まで一貫した量産化体制を構築することで、研究開発活動の迅速な商品化、内製化に繋げてまい
ります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度におきましては、主として、上野原第二工場新棟建設、製造装置及び製品出荷用容器等を中心に901,214千円の設備投資を実施いたしました。

なお、当連結会計年度において重要な設備の除却、売却等はありません。

また、当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2019年1月31日現在

事業所名 (所在地)	部門の名称	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (名)	
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬 具	土地 (面積㎡)	工具、器 具及び備 品	リース 資産		合計
本社・工場 (山梨県 上野原市)	総務部・ 営業部等	管理業務施 設等	1,651,814	858,020	608,641 (15,576)	552,724	30,910	3,702,112	34 〔1〕
	製造部・ 品質管理部 等	半導体用材 料生産設備 等							104 〔17〕

- (注) 1 現在休止中の主要な設備はありません。
 2 上記の帳簿価額には、建設仮勘定及び消費税等は含まれておりません。
 3 従業員数欄の〔外書〕は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
 4 当社の事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(2) 在外子会社

重要性がないため、記載を省略しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

会社名	事業所名 (所在地)	設備の内容	投資予定額		資金調達 方法	着手年月	完了予定 年月
			総額 (千円)	既支払額 (千円)			
三化電子材料 股份有限公司	工場 (台湾苗栗縣 銅羅郷)	建物・製造 設備等	1,600,000	6,992	自己資金及び 借入金	2019年 5月	2020年 5年

(注) 上記の金額に消費税等は含まれておりません。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	27,240,000
計	27,240,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年1月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年4月26日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	7,812,160	7,812,160	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数 100株
計	7,812,160	7,812,160	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2014年2月1日～ 2015年1月31日 (注)	339,000	7,578,160	34,190	783,872	34,190	684,872
2015年2月1日～ 2016年1月31日 (注)	202,000	7,780,160	21,520	805,392	21,520	706,392
2016年2月1日～ 2017年1月31日 (注)	32,000	7,812,160	3,520	808,912	3,520	709,912

(注) 新株予約権の行使による増加であります。

(5) 【所有者別状況】

2019年1月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	19	30	22	76	3	2,530	2,680	—
所有株式数(単元)	—	31,111	1,493	158	9,366	8	35,956	78,092	2,960
所有株式数の割合(%)	—	39.84	1.91	0.20	12.00	0.01	46.04	100.00	—

(注) 自己株式306株は、「個人その他」に3単元、「単元未満株式の状況」に6株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2019年1月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	1,713,600	21.93
竹中 潤平	神奈川県相模原市南区	1,040,960	13.32
日本マスタートラスト信託銀行(株) (信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	354,900	4.54
山梨中央銀行	山梨県甲府市丸の内1丁目20-8	350,000	4.48
トリケミカル研究所従業員持株会	山梨県上野原市上野原8154-217	220,400	2.82
斎藤 隆	神奈川県相模原市南区	208,910	2.67
資産管理サービス信託銀行(株) (証券投資信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-12 晴海トリトンスクエアタワーZ	170,200	2.17
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8-11	149,300	1.91
木曾 幸一	神奈川県相模原市中央区	144,600	1.85
BNY GCM CLIENT ACCOUNT JPRD AC ISG (FE-AC) (常任代理人 (株)三菱UFJ銀行)	PETERBOROUGH COURT 133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB UNITED KINGDOM (東京都千代田区丸の内2丁目7-1)	122,995	1.57
計	—	4,475,865	57.29

(注) 1 (株)三菱UFJフィナンシャル・グループから2018年7月2日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書により、2018年6月25日現在で以下の株式を保有している旨が記載されているものの、当社として2019年1月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記「大株主の状況」では考慮していません。なお、その大量保有報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数(株)	株券等保有割合(%)
三菱UFJ信託銀行(株)	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号	80,600	1.03
三菱UFJ国際投信(株)	東京都千代田区有楽町一丁目12番1号	311,000	3.98

2 レオス・キャピタルワークス(株)から2018年9月28日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書No. 8)により、2018年9月21日現在で以下の株式を保有している旨が記載されているものの、当社として2019年1月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記「大株主の状況」では考慮していません。なお、その大量保有報告書(変更報告書No. 8)の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数(株)	株券等保有割合(%)
レオス・キャピタルワークス(株)	東京都千代田区丸の内一丁目11番1号	1,015,800	13.00

- 3 アセットマネジメントOne(株)から2018年10月23日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書No. 7)及び2018年12月7日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書No. 8)に基づき、主要株主の異動を確認したため、2018年10月24日付及び2018年12月11日付で臨時報告書(主要株主の異動)を提出しております。
- また、同社から2018年12月21日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書No. 9)により、2018年12月14日現在で以下の株式を保有している旨が記載されているものの、当社として2019年1月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記「大株主の状況」では考慮しておりません。なお、その大量保有報告書(変更報告書No. 9)の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (株)	株券等保有割合 (%)
アセットマネジメントOne(株)	東京都千代田区丸の内一丁目8番2号	523,000	6.69
みずほ証券(株)	東京都千代田区大手町一丁目5番1号	7,800	0.10
みずほセキュリティーズアジア (Mizuho Securities Asia Limited)	14-15/F K11 Atelier, 18 Salisbury Road, Tsim Sha Tsui, Kowloon, Hong Kong, S. A. R., The People's Republic of China	0	0.00

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年1月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 300	—	権利内容に何ら限定のない当社 における標準となる株式
完全議決権株式(その他)	普通株式 7,808,900	78,089	同上
単元未満株式	普通株式 2,960	—	同上
発行済株式総数	7,812,160	—	—
総株主の議決権	—	78,089	—

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式6株が含まれております。

② 【自己株式等】

2019年1月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) (株)トリケミカル研究所	山梨県上野原市上野原 8154番地217	300	—	300	0.0
計	—	300	—	300	0.0

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	106	475
当期間における取得自己株式	5	23

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年4月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	306	—	311	—

(注) 当期間における保有自己株式には、2019年4月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、将来にわたる株主価値増大のために内部留保を充実させ、事業の積極展開・体質強化を図るとともに、株主への安定した配当を維持することを利益配分の基本方針としております。

当事業年度の期末配当につきましては、上記方針に基づき、当期の業績及び財務状況等を総合的に勘案した結果、1株当たり45円と決定いたしました。内部留保資金につきましては、今後の設備投資の需要等に備えることとしております。

当社は、「取締役会の決議によって、毎年7月31日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めておりますが、一事業年度の配当回数につきましては、期末配当の年1回を基本方針としており、実施にあたっては収益状況などを勘案して、その都度決定する方針であります。

なお、当社における剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(千円)	1株当たり配当金(円)
2019年4月25日 定時株主総会決議	351,533	45

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第37期	第38期	第39期	第40期	第41期
決算年月	2015年1月	2016年1月	2017年1月	2018年1月	2019年1月
最高(円)	920	829	2,586	5,270	6,480
最低(円)	194	514	381	2,212	3,490

(注) 最高・最低株価は、2018年1月25日以前は東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであり、2018年1月26日以降は東京証券取引所市場第一部におけるものです。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	2018年8月	9月	10月	11月	12月	2019年1月
最高(円)	4,660	4,935	5,000	4,935	6,480	4,720
最低(円)	3,995	3,890	4,145	4,065	3,700	3,490

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものです。

5 【役員 の 状 況】

男性12名 女性一名 (役員のうち女性の比率-%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長	—	竹中 潤平	1940年9月1日	1966年4月 1977年1月 1978年12月 1994年1月 2001年4月 2003年6月 2009年4月 2010年4月 2016年4月	日東弗素工業(株)(現AGCセイミケミカル(株))入社 高純度化学研究所入社 当社設立 代表取締役社長 ㈱エッチ・ビー・アール代表取締役社長 当社代表取締役会長 当社代表取締役社長 当社取締役会長 当社取締役相談役 当社代表取締役会長(現任)	(注)3	1,040,960
代表取締役 社長	—	太附 聖	1964年10月21日	1987年4月 2002年7月 2004年5月 2005年4月 2007年4月 2009年10月 2012年4月 2014年4月 2016年7月 2017年3月	当社入社 当社営業部長 当社営業本部長 ㈱エッチ・ビー・アール取締役 当社取締役営業本部長 ㈱エッチ・ビー・アール監査役(現任) 当社専務取締役 当社代表取締役社長(現任) SK Tri Chem Co., Ltd. 取締役(現任) 三化電子材料股份有限公司董事長(現任)	(注)3	76,000
専務取締役	財務・経理担当	菅原 久勝	1958年3月21日	1983年1月 1985年3月 1987年5月 1988年9月 1992年2月 1996年9月 2000年1月 2004年5月 2005年2月 2006年4月 2007年4月 2012年4月 2016年4月 2016年7月 2017年2月 2017年3月 2018年1月 2018年4月	シルバー精工(株)入社 シチズン時計(株)入社 スコシア・マクラウド証券入社 RBCドミニオン証券入社 トロント・ドミニオン証券入社 DG証券入社 パンカ・イミ証券会社入社 当社入社 Iプロジェクト統括 当社技術部長 当社技術製造本部長 当社取締役技術製造本部長 当社常務取締役技術製造本部長 当社専務取締役技術製造本部長 SK Tri Chem Co., Ltd. 監査役 当社専務取締役財務・経理・品質管理担当 三化電子材料股份有限公司董事(現任) SK Tri Chem Co., Ltd. 取締役(現任) 当社専務取締役財務・経理担当(現任)	(注)3	80,100
常務取締役	営業・開発担当	柴田 雅仁	1967年5月30日	1991年4月 2004年5月 2012年4月 2016年10月 2017年2月 2017年3月 2017年4月	当社入社 当社営業一部長 当社取締役営業本部長 ㈱エッチ・ビー・アール代表取締役社長(現任) 当社取締役営業・開発担当 三化電子材料股份有限公司董事(現任) 当社常務取締役営業・開発担当(現任)	(注)3	42,100
取締役	製造・生産技術 担当	大杉 宏信	1972年8月13日	1995年4月 2006年4月 2017年2月 2017年4月	当社入社 当社製造部長 当社製造・生産技術統括部長 当社取締役製造・生産技術担当(現任)	(注)3	28,500

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役	台湾支店長	小林 恒夫	1953年12月29日	1978年3月 2007年9月 2009年9月 2011年9月 2013年4月 2013年6月 2013年7月 2017年3月 2018年4月	森田化学工業㈱入社 同社執行役員営業部長兼東京支店長 同社取締役営業部長兼東京支店長 同社執行役員韓国担当 同社執行役員営業本部長付 当社入社 当社台湾支店長 三化電子材料股份有限公司監査役 当社取締役台湾支店長(現任)	(注) 3	—
取締役	総務・システム管理・品質管理担当	鈴木 欣秀	1971年7月31日	1994年4月 2007年10月 2014年4月 2017年2月 2018年4月 2018年6月	当社入社 当社経営企画室長 当社管理部長 当社総務・システム管理統括部長 当社取締役総務・システム管理・品質管理担当(現任) 三化電子材料股份有限公司監査役	(注) 3	33,100
取締役 (注) 1	—	神 毅	1938年3月21日	1964年4月 1964年4月 2003年8月 2005年4月 2015年6月 2016年4月	第二東京弁護士会登録 中外合同法律事務所入所(現任) 当社監査役 当社顧問弁護士 ㈱カナデン取締役(現任) 当社取締役(現任)	(注) 3	16,000
取締役 (注) 1	—	太田 周二	1951年12月16日	1975年4月 2000年7月 2013年7月 2014年4月 2015年5月 2017年4月 2017年6月	昭和監査法人(現EY新日本有限責任監査法人)入所 同法人シニアパートナー 太田周二公認会計士事務所所長(現任) 当社監査役 プライムデリカ㈱監査役(現任) 当社取締役(現任) ㈱日本国際放送監査役(現任)	(注) 3	1,000
常勤監査役	—	高松 基晴	1961年5月2日	1984年4月 1988年1月 1992年1月 2003年2月 2004年9月 2017年2月 2018年4月	東海ゴム工業㈱(現住友理工㈱)入社 ㈱東日本イノアック入社 富士通カンタムデバイス㈱(現住友電工デバイス・イノベーション㈱)入社 ケル㈱入社 当社入社 品質管理部長 当社開発部長 当社監査役(現任)	(注) 4	23,700
監査役 (注) 2	—	梅澤 宣喜	1940年8月23日	1961年3月 1993年4月 1995年4月 1997年4月 1999年4月 2000年10月 2008年4月	東京大学農学部入校 東京大学文学部事務長補佐 千葉大学真核微生物研究センター事務長 東京大学農学部附属農場事務長 東京大学薬学部事務長 科学技術振興事業団 今井量子計算機構プロジェクト事務参事 当社監査役(現任)	(注) 5	1,200
監査役 (注) 2	—	萩原 道明	1948年9月30日	1967年4月 1990年4月 2012年4月	日本電信電話公社(現日本電信電話㈱)入社 日本電信電話㈱千代田支店主査 当社監査役(現任)	(注) 5	10,200
計							1,352,860

- (注) 1 取締役神毅、太田周二は、社外取締役であります。
2 監査役梅澤宣喜、萩原道明は、社外監査役であります。
3 2018年1月期に係る定時株主総会終結の時から2020年1月期に係る定時株主総会終結の時まで。
4 2018年1月期に係る定時株主総会終結の時から2022年1月期に係る定時株主総会終結の時まで。
5 2016年1月期に係る定時株主総会終結の時から2020年1月期に係る定時株主総会終結の時まで。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① 企業統治の体制

当社は、研究開発型企業として最先端産業向けの化学薬品の開発、製品応用技術の開発、機能性の探求に経営資源を集中することにより企業価値の増大・最大化を行い、株主等多様なステークホルダーに貢献することがコーポレート・ガバナンスの基本目標であるとの認識の下で、経営執行の透明性の確保と内部統制体制の強化、コンプライアンスに始まる危機管理の徹底を行うこと等により、公正かつ効率的な経営を迅速に行ってまいります。

イ. 会社の機関の内容

当社は、取締役会と監査役制度を採用しており、それぞれ取締役会及び監査役会において重要な業務執行の決議、監督並びに監査をしております。

取締役会は提出日現在、社外取締役2名を含む取締役9名で構成されており、原則として月1回の定時取締役会を開催することとしており、また、必要に応じて臨時の取締役会を開催し、経営の基本方針、法令で定められた事項及びその他経営に関する重要事項を決定しております。なお、取締役会には、経営執行の公正性・透明性を図るために、常勤監査役1名及び社外監査役2名が出席し、取締役の職務遂行を監視しております。さらには、必要に応じて各部門の統括部長、部長を出席させております。

経営戦略会議は、取締役会の決定事項等を執行するために取締役・監査役・各部門の部長以上の職責の従業員23名で構成され、原則として月1回の経営戦略会議を行っており、業務執行の周知徹底を図っております。

監査役会は提出日現在、社外監査役2名を含む監査役3名で構成されており、取締役会その他重要な会議に参加するほか、原則として月1回の定例監査役会を開催しており、監査役相互の情報共有、効率的な監査実行体制の構築に努めております。

ロ. 内部統制システムの整備の状況

当社は、内部統制システムを整備することにより、コンプライアンス遵守・リスクマネジメントの強化等に取り組むとともに、監査役による監査の実効性の確保に向けた取り組みをおこなっております。

a. 取締役・使用人の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための体制

企業倫理規程を制定し、コンプライアンス体制に係る規定を役員・従業員が法令・定款及び社会規範を遵守した行動をとるための行動規範とする。また、その徹底を図るため、コンプライアンス担当取締役をその責任者として総務部においてコンプライアンスの取り組みを横断的に統括することとし、同部を中心に役員・従業員への教育等を行う。

内部監査室は、総務部と連携し、コンプライアンスの状況について監査する。

これらの活動は、定期的に取り締り会及び監査役会に報告されるものとする。

さらに、役員・従業員がコンプライアンス上の問題点を発見した場合は速やかに総務部、常勤監査役又は顧問弁護士等に通報（匿名も可）、報告する体制を構築する。会社は通報内容を秘守し、通報者に対して不利益な取り扱いは行わない。

b. 取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理に関する事項

文書管理規程に従い、取締役の職務執行に係る情報を文書又は電磁的媒体（以下、「文書等」という。）に記録し、保存する。取締役及び監査役は、文書管理規程により、常時これらの文書等を閲覧できるものとする。

c. 損失の危機の管理に関する規程その他の体制

コンプライアンス担当取締役を全社のリスクに関する統括責任者として任命し、総務部において、コンプライアンス、環境、災害、品質、情報セキュリティ及び輸入管理等に係る当社全体のリスク管理を網羅的、総括的に管理する。新たに生じたリスクについては取締役会において速やかに対応責任者となる取締役を任命する。

内部監査室は、各部門ごとのリスク管理の状況を監査し、その結果を定期的にコンプライアンス担当取締役及び取締役会に報告し、取締役会において改善策を審議・決定する。

d. 取締役の職務執行が効率的に行われることを確保するための体制

取締役会は、取締役、従業員が共有する全社的な目標を定め、業務担当取締役はその目標達成のために各部門の具体的な目標及び会社の権限分配、意思決定ルールに基づく権限分配を含めた効率的な達成の方法を定め、ITを活用して取締役会が定期的に進捗状況をレビューし、改善を促すことを内容とする、全般的な業務効率化を実現するシステムを構築する。

具体的には、下記の経営管理システムを用いて、取締役の職務執行の効率化を図る。

- ・ 定例の取締役会を毎月1回開催し、重要事項の決定並びに取締役の職務執行の監督等を行う。
- ・ 月例の取締役及び部門長をメンバーとした経営戦略会議において年1回将来の事業環境を踏まえた中期経営計画、年度予算を策定し、全社的な目標を設定し、取締役会の承認を得るものとする。各拠点、部門においては、その目標達成に向けた具体策を立案、実行する。
- ・ 当社の基幹システムを活用し、月次、四半期業績管理を実施する。
- ・ 取締役会・経営戦略会議による月次業績のレビューと改善策の立案、実施をする。

e. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正性を確保するための体制

当社及び子会社と関連会社からなる企業集団の業務の適正性を確保するため、また、グループ間取引の適正をはかるため、関係会社管理規程に基づき、財務・経理担当取締役は関係会社に対する業務の全般を管理し、適切な監視体制及び報告体制を確保する。

子会社については、定期的な業務執行状況の報告を求め、子会社の経営方針、計画について確認と調整を行う。また、当社の企業倫理規程を子会社にも指針として活用するとともに、定期的に当社からの内部監査を実施する。

なお、関連会社の経営については、その自主性を尊重しつつ、事業内容の定期的な報告と重要案件についての事前協議を行う。

f. 監査役会がその補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制並びにその使用人の取締役からの独立性に関する事項

現在監査役の職務を補助する使用人はいないが、必要に応じて、監査役の業務補助のためのスタッフを任命できるものとする。

また、監査役は内部監査室長及びその所属員に監査業務に必要な事項を命令することができるものとし、命令を受けた者は、その命令に対して、取締役、内部監査室長の指揮命令を受けないものとする。

g. 取締役及び使用人が監査役会に報告するための体制その他の監査役会への報告に関する体制

取締役又は使用人は、監査役会に対して、法定の事項に加えて当社に重要な影響を及ぼす事項、内部監査の実施状況、コンプライアンス委員会・総務部への通報状況及びその内容を速やかに報告する体制を整備する。

また、会社は監査役及び監査役会に報告をした者に対して、当該報告をしたことを理由として、いかなる不利益な取り扱いもしてはならない。

h. 監査役の職務の執行について生ずる費用等の処理に関する体制

監査役の職務の執行について生ずる費用等の請求の手続きを定め、監査役から前払い又は償還等の請求があった場合には、当該請求にかかる費用が監査役の職務の執行に必要でないと明らかに認められる場合を除き、所定の手続きに従い、これに応じるものとする。

i. その他監査役会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査役会と代表取締役社長との間で定期的な意見交換会を実施する。また、監査役会に対して、必要に応じて弁護士、会計士等の専門家を雇用し、監査業務に助言を受ける機会を保証する。

なお、監査役は当社の会計監査人から会計監査に関する内容について説明を受けるとともに、情報交換等の連携を図る。

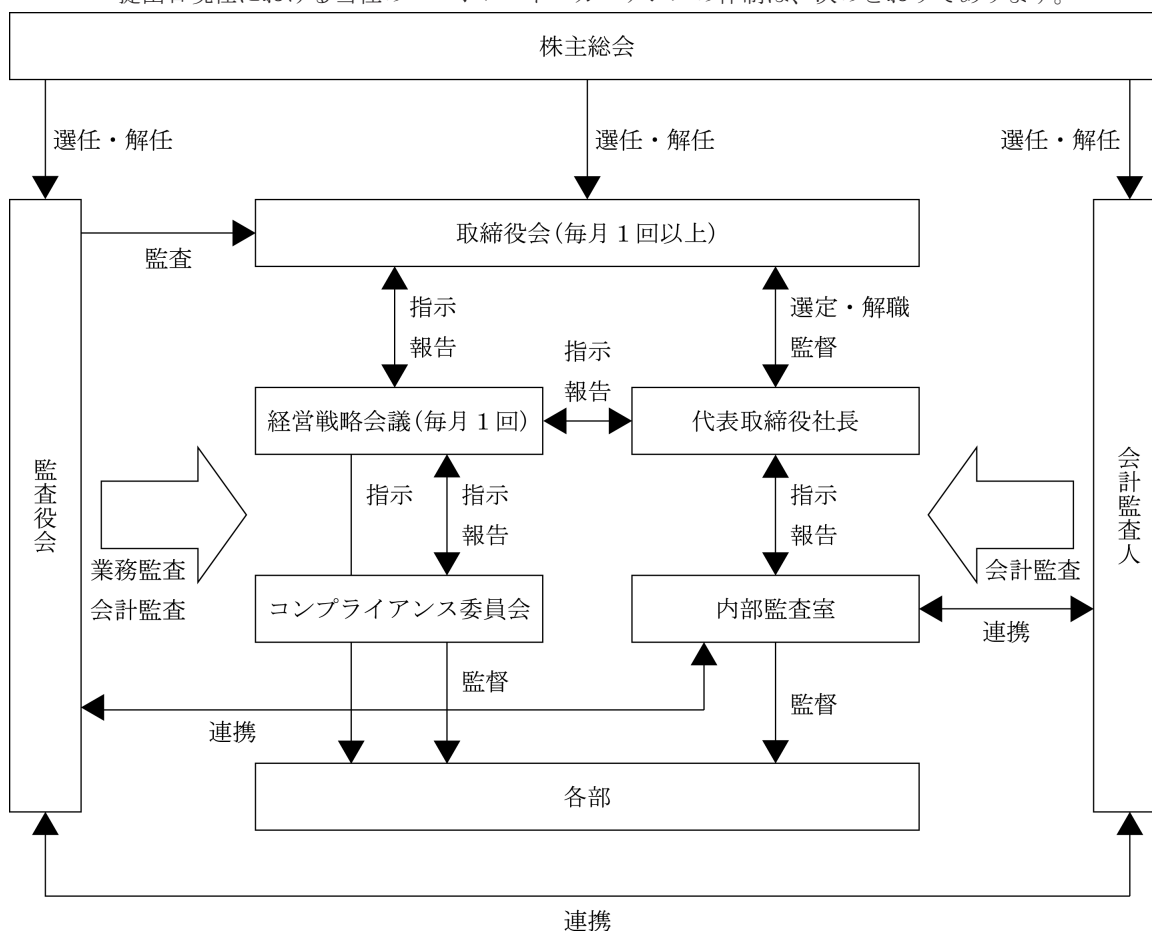
ハ. リスク管理体制の整備の状況

当社では総合的なリスク管理については、経営戦略会議において討議しており、事業上の予見可能なリスクの防止に努めております。また、重要な事項につきましては、取締役会で対応の検討及び対策の決定をしております。

「経営の健全性の維持」の観点から、コンプライアンスの徹底を図るため、コンプライアンス委員会を組織しております。委員会は現在各部門の課長以上で構成されております。なお、当委員会は、顧問弁護士に法的な側面からアドバイスを受ける体制を採っております。

また、企業倫理規程を制定し、コンプライアンス体制に係る規定を役員・従業員が法令・定款及び社会規範を遵守した行動をとるための行動規範とすることとしており、その徹底を図るため、コンプライアンス担当取締役をその責任者として総務部においてコンプライアンスの取り組みを横断的に統括し、同部を中心に役員・従業員への教育等を行うこととしております。

提出日現在における当社のコーポレート・ガバナンスの体制は、次のとおりであります。



② 内部監査及び監査役監査

当社では、内部監査室、会計監査人及び監査役会が相互に連携して、内部統制の管理をしております。内部監査室については社長直轄の組織であり、提出日現在2名体制により、業務体制にかかる監査を行うとともに、監査役より助言、指導を受けており、内部統制の情報の共有化及び実効性の確保に努めております。また、会計監査人による会計監査については、会計監査人と内部監査室及び監査役会が、監査内容や課題について共通認識を深めるために情報交換を積極的に行っております。

監査役会は提出日現在、社外監査役2名を含む3名で構成されており、監査役会で定めた監査方針・計画に基づき、取締役会等重要な会議に参加するほか、取締役及び各統括部長・部長等から営業・開発等の報告を受け、また、各部での実査、重要書類の閲覧等を行い、業務監査並びに会計監査について取締役の職務遂行を監視する体制を整えております。

なお、監査役梅澤宣喜氏は長年にわたる経理業務の経験を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

③ 社外取締役及び社外監査役

提出日現在、当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役及び社外監査役を選任するための当社からの独立性に関する基準又は方針はないものの、選任にあたっては、株式会社東京証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準等を参考にしております。なお、当社は株式会社東京証券取引所に対して上記4名を独立役員とする独立役員届出書を提出しております。

社外取締役神毅氏は弁護士として企業法務に精通しております。なお、神毅氏との人的、取引関係はありません。また、神毅氏は、「5 役員の状況」に記載のとおり、当社の個人株主であります。

社外取締役太田周二氏は公認会計士として財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。なお、太田周二氏との人的、取引関係はありません。また、太田周二氏は、「5 役員の状況」に記載のとおり、当社の個人株主であります。

社外監査役梅澤宣喜氏、萩原道明氏との人的、取引関係はありません。なお、梅澤宣喜氏、萩原道明氏は、「5 役員の状況」に記載のとおり、当社の個人株主であります。

また、各社外取締役及び社外監査役は、当社と資本関係のある会社、大株主、主要な取引先の出身者ではありません。

社外取締役と社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部監査室との関係については、取締役会、監査役会等において、直接又は間接に適宜報告及び意見交換がなされております。

当社と社外取締役である神毅氏及び太田周二氏とは、当社定款の定めに基づき、会社法第423条第1項の責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が定める額であります。

当社と社外監査役である梅澤宣喜氏、萩原道明氏とは、当社定款の定めに基づき、会社法第423条第1項の責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が定める額であります。

④ 役員の報酬等

イ. 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	142,355	112,784	—	29,571	—	7
監査役 (社外監査役を除く。)	14,915	12,165	—	2,750	—	2
社外役員	21,300	16,920	—	4,380	—	4

ロ. 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載していません。

ハ. 役員の報酬等の額の決定に関する方針

役員の基本報酬に関しましては、役割と責任に応じた一定額を支給しており、経営状況、経済情勢等を考慮して取締役の報酬は取締役会決議により、監査役の報酬は監査役の協議により決定しております。

また、役員賞与につきましては、全社業績、配当政策等を勘案した上で、取締役会の決議により決定しております。

⑤ 株式の保有状況

イ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 1 銘柄
 貸借対照表計上額の合計額 11,869千円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
 (前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
㈱山梨中央銀行	39,807	18,391	協力関係維持のため

(当事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
㈱山梨中央銀行	8,564	11,869	協力関係維持のため

(注) ㈱山梨中央銀行は、2018年10月1日付で5株を1株の併合比率で株式併合しております。

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

⑥ 会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士は渡邊力夫氏、伊藤正広氏の2名であり、EY新日本有限責任監査法人に所属し、会計監査業務に係る補助者は、公認会計士6名、その他11名であります。

会計監査人は監査の都度、監査役に監査概要を報告しております。

(注) 2018年7月1日付で新日本有限責任監査法人から名称変更しております。

⑦ 取締役会で決議できる株主総会決議事項

イ. 自己の株式の取得

当社は、自己の株式の取得について、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

ロ. 中間配当

当社は、機動的な利益還元を可能とするため、取締役会の決議によって、毎年7月31日を基準日として中間配当をすることができる旨を定款で定めております。

ハ. 取締役の責任免除

当社は、取締役が職務を遂行するにあたり期待される役割を十分に発揮することができるように任務を怠ったことによる取締役(取締役であった者を含む。)の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨、及び将来社外取締役を選任することとなる場合に優秀な人材を招聘でき、またその職務を遂行するにあたり、期待される役割を十分に発揮することができるように、社外取締役との間に法令が規定する額を限度額とする責任限定契約を締結できる旨を定款で定めております。

ニ. 監査役の責任免除

当社は、監査役が職務を遂行するにあたり期待される役割を十分に発揮することができるように会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる監査役(監査役であった者を含む。)の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款で定めております。

⑧ 取締役の定数

当社の取締役は10名以内とする旨を定款で定めております。

⑨ 取締役の選任の決議要件

取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、また、取締役の選任決議は、累積投票によらない旨を定款に定めております。

⑩ 株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うため、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前事業年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	19,800	—	21,000	—
連結子会社	—	—	—	—
計	19,800	—	21,000	—

② 【その他重要な報酬の内容】

(当連結会計年度)

当社の連結子会社である三化電子材料股份有限公司は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているErnst&Youngのメンバーファームに対して、585千円の監査証明業務に基づく報酬があります。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当事項はありませんが、監査日数等を勘案した上で決定しております。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

(3) 当連結会計年度(2018年2月1日から2019年1月31日まで)は、連結財務諸表の作成初年度であるため、以下に掲げる連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書及び連結キャッシュ・フロー計算書については、前連結会計年度との対比は行っておりません。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年2月1日から2019年1月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年2月1日から2019年1月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

なお、従来、当社が監査証明を受けている新日本有限責任監査法人は、2018年7月1日に名称を変更し、EY新日本有限責任監査法人となりました。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、監査法人等が主催するセミナーへの参加や会計専門誌の定期購読を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

		当連結会計年度 (2019年1月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金		1,595,747
受取手形及び売掛金		1,808,824
電子記録債権		1,042,313
商品及び製品		53,020
仕掛品		395,790
原材料及び貯蔵品		484,061
繰延税金資産		46,835
その他		57,599
流動資産合計		5,484,191
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※2	2,569,990
減価償却累計額		△916,646
建物及び構築物（純額）	※1	1,653,343
機械装置及び運搬具	※2	1,876,986
減価償却累計額		△1,018,965
機械装置及び運搬具（純額）		858,020
工具、器具及び備品	※2	1,738,753
減価償却累計額		△1,186,029
工具、器具及び備品（純額）		552,724
土地	※1	608,641
リース資産		39,246
減価償却累計額		△8,336
リース資産（純額）		30,910
建設仮勘定		240,383
有形固定資産合計		3,944,024
無形固定資産		70,211
投資その他の資産		
投資有価証券		1,595,054
その他		19,448
投資その他の資産合計		1,614,502
固定資産合計		5,628,739
資産合計		11,112,931

(単位：千円)

当連結会計年度
(2019年1月31日)

負債の部		
流動負債		
買掛金		353,684
短期借入金	※3	580,000
1年内返済予定の長期借入金	※1	712,880
リース債務		5,659
未払法人税等		401,650
繰延税金負債		246
賞与引当金		63,857
その他		450,968
流動負債合計		2,568,947
固定負債		
長期借入金	※1	1,377,839
リース債務		28,174
繰延税金負債		17,996
退職給付に係る負債		94,188
固定負債合計		1,518,198
負債合計		4,087,145
純資産の部		
株主資本		
資本金		808,912
資本剰余金		709,912
利益剰余金		5,550,282
自己株式		△897
株主資本合計		7,068,210
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金		△4,399
為替換算調整勘定		△9,382
退職給付に係る調整累計額		△28,642
その他の包括利益累計額合計		△42,424
純資産合計		7,025,785
負債純資産合計		11,112,931

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)	
売上高		7,792,295
売上原価	※1	4,200,456
売上総利益		3,591,839
販売費及び一般管理費	※2, ※3	1,438,666
営業利益		2,153,173
営業外収益		
受取利息		104
受取配当金		286
持分法による投資利益		826,688
その他		28,370
営業外収益合計		855,450
営業外費用		
支払利息		11,983
為替差損		27,149
シンジケートローン手数料		30,000
その他		7,810
営業外費用合計		76,942
経常利益		2,931,680
税金等調整前当期純利益		2,931,680
法人税、住民税及び事業税		623,529
法人税等調整額		40,927
法人税等合計		664,457
当期純利益		2,267,222
親会社株主に帰属する当期純利益		2,267,222

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)	
当期純利益	2,267,222
その他の包括利益	
その他有価証券評価差額金	△7,722
為替換算調整勘定	△18,005
退職給付に係る調整額	△12,051
持分法適用会社に対する持分相当額	△56,276
その他の包括利益合計	※ △94,056
包括利益	2,173,166
(内訳)	
親会社株主に係る包括利益	2,173,166
非支配株主に係る包括利益	—

③ 【連結株主資本等変動計算書】

当連結会計年度(自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	808,912	709,912	3,447,110	△421	4,965,514
当期変動額					
剰余金の配当			△164,051		△164,051
親会社株主に帰属する 当期純利益			2,267,222		2,267,222
自己株式の取得				△475	△475
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	2,103,171	△475	2,102,696
当期末残高	808,912	709,912	5,550,282	△897	7,068,210

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計	
当期首残高	3,323	64,898	△16,590	51,631	5,017,146
当期変動額					
剰余金の配当					△164,051
親会社株主に帰属する 当期純利益					2,267,222
自己株式の取得					△475
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	△7,722	△74,281	△12,051	△94,056	△94,056
当期変動額合計	△7,722	△74,281	△12,051	△94,056	2,008,639
当期末残高	△4,399	△9,382	△28,642	△42,424	7,025,785

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	
税金等調整前当期純利益	2,931,680
減価償却費	483,929
賞与引当金の増減額 (△は減少)	2,464
受取利息及び受取配当金	△391
支払利息	11,983
持分法による投資損益 (△は益)	△826,688
売上債権の増減額 (△は増加)	△486,526
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△97,047
仕入債務の増減額 (△は減少)	△31,157
未払又は未収消費税等の増減額	11,294
未払金の増減額 (△は減少)	△22,111
その他の流動資産の増減額 (△は増加)	22,307
その他の流動負債の増減額 (△は減少)	△5,079
その他の固定負債の増減額 (△は減少)	24,101
その他	△19,846
小計	1,998,913
利息及び配当金の受取額	391
利息の支払額	△11,948
法人税等の支払額	△576,065
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,411,291
投資活動によるキャッシュ・フロー	
投資有価証券の取得による支出	△1,201
有形固定資産の取得による支出	△1,199,286
無形固定資産の取得による支出	△29,544
差入保証金の差入による支出	△14,593
投資活動によるキャッシュ・フロー	△1,244,626
財務活動によるキャッシュ・フロー	
長期借入れによる収入	1,120,000
長期借入金の返済による支出	△681,938
リース債務の返済による支出	△3,639
自己株式の取得による支出	△475
配当金の支払額	△164,120
財務活動によるキャッシュ・フロー	269,826
現金及び現金同等物に係る換算差額	△12,337
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	424,154
現金及び現金同等物の期首残高	1,171,593
現金及び現金同等物の期末残高	※ 1,595,747

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 1社

連結子会社の名称 三化電子材料股份有限公司

当連結会計年度より、三化電子材料股份有限公司は、重要性が増したため、連結の範囲に含めております。

2. 持分法の適用に関する事項

持分法を適用した関連会社数 2社

持分法適用会社の名称 SK Tri Chem Co., Ltd.

株式会社エッチ・ビー・アール

当連結会計年度より、連結財務諸表を作成することになったため、SK Tri Chem Co., Ltd. 及び株式会社エッチ・ビー・アールを持分法適用の範囲に含めております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4 持分法の適用手続について特に記載する必要があると認められる事項

持分法適用会社のうち、決算日が連結決算日と異なる会社については、当該会社の事業年度に係る財務諸表を使用しております。当該決算日と連結決算日の間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

5 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

② デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

③ たな卸資産の評価基準及び評価方法

総平均法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

ただし、貯蔵品の容器は個別法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

ただし、取得価額10万円以上20万円未満の少額減価償却資産については3年間の均等償却によっております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物 5～40年

機械装置及び運搬具 2～8年

工具、器具及び備品 2～15年

- ② 無形固定資産(リース資産を除く)
定額法によっております。
ただし、ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。
 - ③ リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。
- (3) 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算の基準
外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。
- (4) 重要な引当金の計上基準
- ① 貸倒引当金
債権等の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。なお、当連結会計年度末における計上はありません。
 - ② 賞与引当金
従業員賞与の支払に備えるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度の負担額を計上しております。
- (5) 退職給付に係る会計処理の方法
- ① 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。
 - ② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法
過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理しております。
数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。
- (6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期的な投資からなっております。
- (7) その他連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項
消費税等の会計処理方法
税抜方式を採用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

- ステップ1: 顧客との契約を識別する。
- ステップ2: 契約における履行義務を識別する。
- ステップ3: 取引価格を算定する。
- ステップ4: 契約における履行義務に取引価格を配分する。
- ステップ5: 履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2023年1月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

※1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
建物及び構築物	212,525千円
土地	299,581 〃
計	512,107千円

担保付債務は次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
長期借入金(1年内返済予定の 長期借入金含む)	350,000千円
計	350,000千円

※2 国庫補助金等により取得した資産につき、取得価額から控除されている圧縮記帳額は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
建物及び構築物	75,699千円
機械装置及び運搬具	34,394 〃
工具、器具及び備品	714 〃
計	110,808千円

※3 当社グループは、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行4行と当座貸越契約を締結しております。契約に基づく当連結会計年度末の借入金未実行残高等は次のとおりであります。

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
当座貸越極度額	2,700,000千円
借入実行残高	580,000 〃
差引額	2,120,000千円

(連結損益計算書関係)

※1 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下額は次のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
売上原価	20,507千円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
荷造運賃費	142,148千円
給与手当	228,945 "
賞与引当金繰入額	18,754 "
役員報酬	141,869 "
退職給付費用	9,824 "
研究開発費	408,913 "
減価償却費	9,801 "

※3 一般管理費に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
一般管理費	408,913千円

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	(千円)
	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
その他有価証券評価差額金	
当期発生額	△7,722
組替調整額	—
税効果調整前	△7,722
税効果額	—
その他有価証券評価差額金	△7,722
為替換算調整勘定	
当期発生額	△18,005
退職給付に係る調整額	
当期発生額	△22,296
組替調整額	5,049
税効果調整前	△17,246
税効果額	5,194
退職給付に係る調整額	△12,051
持分法適用会社に対する持分相当額	
当期発生額	△56,276
その他の包括利益合計	△94,056

(連結株主資本等変動計算書関係)

当連結会計年度(自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(千株)	7,812	—	—	7,812

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（千株）	0	0	—	0

（変動事由の概要）

増加数の主な内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取による増加 0千株

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

（1）配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （千円）	1株当たり配当額 （円）	基準日	効力発生日
2018年4月26日 定時株主総会	普通株式	164,051	21	2018年1月31日	2018年4月27日

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 （千円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年4月25日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	351,533	45	2019年1月31日	2019年4月26日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 （自 2018年2月1日 至 2019年1月31日）
現金及び預金	1,595,747千円
預入期間が3か月を超える 定期預金	— 〃
現金及び現金同等物	1,595,747千円

（リース取引関係）

1. ファイナンス・リース取引

（借主側）

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

・有形固定資産 主として上野原第二工場における生産設備（機械及び装置）であります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「5 会計方針に関する事項（2）重要な減価償却資産の減価償却方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

（借主側）

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

（単位：千円）

	当連結会計年度 （2019年1月31日）
1年内	13,193
1年超	249,575
合計	262,768

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループでは、一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用し、資金調達については銀行等金融機関からの借入による方針であります。また、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されております。また、外貨建の営業債権は為替の変動リスクにも晒されております。

投資有価証券である株式は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスク及び発行体の信用リスクに晒されております。

借入金のうち、短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金及びファイナンス・リース取引に係るリース債務は主に設備投資に必要な資金調達を目的としたものであります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社の与信管理規程等に従い、毎月、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行い、信用状況を把握するとともに主要な取引先の状況を定期的に調査し、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

② 市場リスクの管理

外貨建での営業債権債務について、通貨別月別に把握された為替の変動リスクに対して、社内規程に従い、必要に応じて先物為替予約を利用してヘッジしております。

投資有価証券につきましては、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況の把握を行っております。

③ 資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社グループでは、適時に資金繰計画を作成するなどの方法により流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません(注2)を参照ください。)

当連結会計年度(2019年1月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	1,595,747	1,595,747	—
(2) 受取手形及び売掛金	1,808,824	1,808,824	—
(3) 電子記録債権	1,042,313	1,042,313	—
(4) 投資有価証券			
その他有価証券	11,869	11,869	—
資産計	4,458,754	4,458,754	—
(5) 短期借入金	580,000	580,000	—
(6) 長期借入金(※1)	2,090,719	2,092,317	1,598
(7) リース債務(※2)	33,833	33,797	△36
負債計	2,704,552	2,706,114	1,561

(※1) 1年以内に期限到来の流動負債に含まれている長期借入金を含めております。

(※2) 1年以内に期限到来の流動負債に含まれているリース債務を含めております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法及び有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 投資有価証券

投資有価証券の時価について、株式は取引所の価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記を参照ください。

負 債

(5) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(6) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算出する方法によっております。

(7) リース債務

リース債務の時価については、元利金の合計額を新規に同様のリース取引を行った場合に想定される利率で割り引いて算出する方法によっております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額
(単位:千円)

区分	2019年1月31日
非上場株式	1,583,184

上記については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、注記対象には含めておりません。

(注3) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額
当連結会計年度(2019年1月31日)

	1年以内 (千円)
現金及び預金	1,595,747
受取手形及び売掛金	1,808,824
電子記録債権	1,042,313
合計	4,446,884

(注4) 長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
当連結会計年度(2019年1月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	580,000	—	—	—	—	—
長期借入金	712,880	548,292	485,456	241,333	65,358	37,400
リース債務	5,659	4,736	4,509	4,603	4,150	10,174
合計	1,298,539	553,028	489,965	245,936	69,508	47,574

(有価証券関係)

1 その他有価証券

当連結会計年度(2019年1月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	—	—	—
株式	—	—	—
小計	—	—	—
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	11,869	16,269	△4,399
小計	11,869	16,269	△4,399
合計	11,869	16,269	△4,399

(デリバティブ取引関係)

当連結会計年度(2019年1月31日)

当社グループは、為替予約取引を行っておりますが、2019年1月31日現在の取引残高はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定拠出型の制度として中小企業退職金共済制度を採用しております。また、当該制度に加え、一定要件を満たした従業員の退職に際して割増退職金を支払う制度（確定給付制度）を設けております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	(千円)
	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
退職給付債務の期首残高	70,086
勤務費用	6,252
利息費用	248
数理計算上の差異の発生額	22,296
退職給付の支払額	△4,695
退職給付債務の期末残高	94,188

(2) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

	(千円)
	当連結会計年度 (2019年1月31日)
非積立型制度の退職給付債務	94,188
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	94,188
退職給付に係る負債	94,188
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	94,188

(3) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	(千円)
	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
勤務費用	6,252
利息費用	248
数理計算上の差異の費用処理額	3,225
過去勤務費用の費用処理額	1,823
確定給付制度に係る退職給付費用	11,550

(4) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	(千円)
	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
過去勤務費用	1,823
数理計算上の差異	△19,070
合計	△17,246

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	(千円)
	当連結会計年度 (2019年1月31日)
未認識過去勤務費用	△1,823
未認識数理計算上の差異	△39,164
合計	△40,988

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
割引率	0.3%

3 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は、当連結会計年度22,965千円であります。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(繰延税金資産)

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
(1) 流動資産	
賞与引当金	21,752千円
たな卸資産評価損	20,569 "
法人事業税	20,761 "
その他	4,327 "
小計	67,410千円
評価性引当額	△20,569 "
繰延税金負債(流動)との相殺	△6 "
合計	46,835千円
(2) 固定資産	
投資有価証券評価損	2,609千円
退職給付に係る負債	28,369 "
小計	30,979千円
評価性引当額	△2,609 "
繰延税金負債(固定)との相殺	△28,369 "
合計	一千円
繰延税金資産合計	46,835千円

(繰延税金負債)

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
(1) 流動負債	
その他	△253千円
小計	△253千円
繰延税金資産（流動）との相殺	6 "
合計	△246千円
(2) 固定負債	
未分配利益の税効果	△46,366千円
小計	△46,366千円
繰延税金資産（固定）との相殺	28,369 "
合計	△17,996千円
繰延税金負債合計	△18,243千円
差引：繰延税金資産の純額	28,591千円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	当連結会計年度 (2019年1月31日)
法定実効税率	30.4%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6%
持分法投資損益	△8.6%
未分配利益の税効果	1.6%
税額控除	△1.6%
その他	0.3%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	22.7%

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社グループの事業は、半導体等製造用高純度化学化合物事業並びにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

当連結会計年度(自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

日本 (千円)	台湾 (千円)	アジア (除く台湾) (千円)	その他 (千円)	合計 (千円)
3,009,165	4,263,089	504,102	15,938	7,792,295

(注) 売上高は最終顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高 (千円)	関連するセグメント名
日本エア・リキード㈱	3,115,432	高純度化学化合物事業
TOPCO Scientific Co., Ltd.	1,774,432	〃

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者の取引

連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

当連結会計年度(自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万韓国 ウォン)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
関連会社	SK Tri Chem Co., Ltd.	大韓民国 世宗特別 自治市	25,000	高純度化学 薬品の開発、 製造及び販売	(所有) 直接 35.0	当社製品の 販売 役員の兼任	当社製品の 販売 (注)	161,785	売掛金	117,077

(注) 取引条件については、相手方と協議し、個別に交渉の上決定しております。

2 重要な関連会社に関する注記

重要な関連会社の要約財務情報

当連結会計年度において、重要な関連会社はSK Tri Chem Co., Ltd. であり、その要約財務情報は以下のとおりであります。

(単位：千円)

	当連結会計年度
流動資産合計	3,678,106
固定資産合計	3,733,185
流動負債合計	1,631,997
固定負債合計	1,320,145
純資産合計	4,459,149
売上高	5,914,585
税引前当期純利益	2,678,464
当期純利益	2,354,840

(1株当たり情報)

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
1株当たり純資産額	899.37円
1株当たり当期純利益	290.23円

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当連結会計年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	2,267,222
普通株主に帰属しない金額(千円)	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	2,267,222
普通株式の期中平均株式数(株)	7,811,932

(重要な後発事象)

(重要な設備投資)

当社は、2019年2月28日開催の取締役会において、連結子会社である三化電子材料股份有限公司が固定資産を取得することを決議いたしました。

1 取得の目的

当社グループの中長期におけるグローバル戦略の中核として、当社グループの主要な販売先である台湾のユーザーに対し、現地に生産・開発拠点を設けることにより、そのニーズにスムーズかつ迅速に応えることで当社グループの持続的な成長を図るものであります。

2 取得資産の内容

- (1) 所在地 中華民国(台湾)苗栗縣銅羅郷
- (2) 敷地面積 14,200.58㎡
- (3) 延床面積 5,333.42㎡
- (4) 取得価額 約14億円(建物)

3 取得の日程

- (1) 着工 2019年5月(予定)
- (2) 竣工 2020年5月(予定)

4 当該設備が営業・生産活動に及ぼす重要な影響

当該取得による2020年1月期の連結業績予想への影響は軽微であります、中長期的な観点においては業績向上に資するものと判断しております。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	580,000	580,000	0.4	—
1年以内に返済予定の長期借入金	531,752	712,880	0.5	—
1年以内に返済予定のリース債務	1,704	5,659	2.8	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	1,120,905	1,377,839	0.4	2020年5月27日～ 2025年7月31日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	1,648	28,174	2.8	2020年5月2日～ 2026年8月31日
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	2,236,009	2,704,552	—	—

(注) 1 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	548,292	485,456	241,333	65,358
リース債務	4,736	4,509	4,603	4,150

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (千円)	1,924,581	3,800,432	5,778,613	7,792,295
税金等調整前 四半期(当期)純利益 (千円)	536,192	1,155,355	2,079,568	2,931,680
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益 (千円)	372,764	836,766	1,558,815	2,267,222
1株当たり 四半期(当期)純利益 (円)	47.72	107.11	199.54	290.23

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり 四半期純利益 (円)	47.72	59.40	92.43	90.68

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,134,240	1,258,379
受取手形	126,425	165,344
電子記録債権	845,253	1,042,313
売掛金	※1 1,393,276	※1 1,642,561
商品及び製品	27,637	51,908
仕掛品	334,404	395,790
原材料及び貯蔵品	473,813	484,061
前払費用	17,269	18,167
繰延税金資産	43,128	46,457
その他	※1 91,008	38,062
流動資産合計	4,486,457	5,143,046
固定資産		
有形固定資産		
建物	※2, ※3 1,001,590	※2, ※3 1,580,576
構築物	※3 63,792	※3 71,238
機械及び装置	※3 734,603	※3 857,919
車両運搬具	708	101
工具、器具及び備品	※3 466,509	※3 552,724
土地	※2 608,641	※2 608,641
リース資産	3,046	30,910
建設仮勘定	680,475	233,579
有形固定資産合計	3,559,367	3,935,691
無形固定資産		
ソフトウェア	10,521	12,766
その他	35,108	57,445
無形固定資産合計	45,630	70,211
投資その他の資産		
投資有価証券	18,391	11,869
関係会社株式	905,945	1,241,266
繰延税金資産	13,959	16,023
その他	2,524	1,273
投資その他の資産合計	940,820	1,270,433
固定資産合計	4,545,817	5,276,336
資産合計	9,032,275	10,419,383

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	※1 384,858	※1 353,682
短期借入金	※4 580,000	※4 580,000
1年内返済予定の長期借入金	※2 531,752	※2 712,880
リース債務	1,704	5,659
未払金	747,095	※1 356,626
未払費用	49,591	48,642
未払法人税等	357,567	398,013
前受金	5,075	5,140
預り金	30,758	33,717
賞与引当金	61,419	62,919
その他	24,301	12,424
流動負債合計	2,774,122	2,569,705
固定負債		
長期借入金	※2 1,120,905	※2 1,377,839
リース債務	1,648	28,174
退職給付引当金	46,344	53,199
固定負債合計	1,168,897	1,459,213
負債合計	3,943,020	4,028,918
純資産の部		
株主資本		
資本金	808,912	808,912
資本剰余金		
資本準備金	709,912	709,912
資本剰余金合計	709,912	709,912
利益剰余金		
利益準備金	5,194	5,194
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	3,562,332	4,871,741
利益剰余金合計	3,567,526	4,876,935
自己株式	△421	△897
株主資本合計	5,085,930	6,394,864
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	3,323	△4,399
評価・換算差額等合計	3,323	△4,399
純資産合計	5,089,254	6,390,464
負債純資産合計	9,032,275	10,419,383

② 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年2月1日 至 2018年1月31日)	当事業年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
売上高	※1 6,445,728	※1 7,793,177
売上原価		
製品期首たな卸高	12,174	27,637
当期製品製造原価	3,574,147	4,224,985
合計	3,586,321	4,252,622
製品期末たな卸高	27,637	51,908
売上原価合計	※1 3,558,683	※1 4,200,714
売上総利益	2,887,045	3,592,462
販売費及び一般管理費	※2 1,288,842	※1,※2 1,455,738
営業利益	1,598,202	2,136,723
営業外収益		
受取利息	39	33
受取配当金	306	286
受取ロイヤリティー	35,961	21,545
その他	※1 7,565	※1 7,467
営業外収益合計	43,872	29,332
営業外費用		
支払利息	11,096	11,983
為替差損	4,439	28,405
シンジケートローン手数料	—	30,000
その他	3,739	7,810
営業外費用合計	19,276	78,198
経常利益	1,622,799	2,087,857
特別利益		
補助金収入	38,520	—
特別利益合計	38,520	—
特別損失		
固定資産圧縮損	36,985	—
特別損失合計	36,985	—
税引前当期純利益	1,624,333	2,087,857
法人税、住民税及び事業税	490,447	619,791
法人税等調整額	△11,771	△5,394
法人税等合計	478,675	614,397
当期純利益	1,145,658	1,473,460

【製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2017年2月1日 至 2018年1月31日)		当事業年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)		
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)	
I 材料費	※1	1,779,398	47.9	2,210,032	49.4	
II 労務費		934,726	25.1	1,029,899	23.0	
III 製造経費		1,004,693	27.0	1,235,971	27.6	
当期総製造費用		3,718,818	100.0	4,475,903	100.0	
仕掛品期首たな卸高		260,869		334,404		
合計		3,979,687		4,810,307		
仕掛品期末たな卸高		334,404		395,790		
他勘定振替高		※2	302,414		408,913	
差引			3,342,868		4,005,604	
他勘定受入高		※3	231,278		219,381	
当期製品製造原価		3,574,147		4,224,985		

(注) ※1 主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度 (千円)	当事業年度 (千円)
減価償却費	365,618	474,128

※2 他勘定振替高の内容は、研究開発費等への振替によるものであります。

※3 他勘定受入高の内容は、貯蔵容器等の受入によるものであります。

(原価計算の方法)

当社の原価計算は、総合原価計算による実際原価計算であります。

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年 2月 1日 至 2018年 1月 31日)

(単位：千円)

	株主資本						自己株式	株主資本合計	評価・換算 差額等 その他有価 証券評価差 額金	純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金						
		資本準備金	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益剰 余金	利益剰余金 合計					
当期首残高	808,912	709,912	5,194	2,541,667	2,546,861	△18	4,065,668	5,486	4,071,154	
当期変動額										
剰余金の配当				△124,993	△124,993		△124,993		△124,993	
自己株式の取得						△402	△402		△402	
当期純利益				1,145,658	1,145,658		1,145,658		1,145,658	
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)								△2,162	△2,162	
当期変動額合計	—	—	—	1,020,664	1,020,664	△402	1,020,262	△2,162	1,018,099	
当期末残高	808,912	709,912	5,194	3,562,332	3,567,526	△421	5,085,930	3,323	5,089,254	

当事業年度(自 2018年 2月 1日 至 2019年 1月 31日)

(単位：千円)

	株主資本						自己株式	株主資本合計	評価・換算 差額等 その他有価 証券評価差 額金	純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金						
		資本準備金	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益剰 余金	利益剰余金 合計					
当期首残高	808,912	709,912	5,194	3,562,332	3,567,526	△421	5,085,930	3,323	5,089,254	
当期変動額										
剰余金の配当				△164,051	△164,051		△164,051		△164,051	
自己株式の取得						△475	△475		△475	
当期純利益				1,473,460	1,473,460		1,473,460		1,473,460	
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)								△7,722	△7,722	
当期変動額合計	—	—	—	1,309,408	1,309,408	△475	1,308,933	△7,722	1,301,210	
当期末残高	808,912	709,912	5,194	4,871,741	4,876,935	△897	6,394,864	△4,399	6,390,464	

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

① 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

② その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

(2) デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

(3) たな卸資産の評価基準及び評価方法

総平均法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

ただし、貯蔵品の容器は個別法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

2 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

ただし、取得価額10万円以上20万円未満の少額減価償却資産については3年間の均等償却によっております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 8～38年

構築物 10～40年

機械及び装置 2～8年

車両運搬具 4年

工具、器具及び備品 2～15年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

ただし、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

3 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権等の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

なお、当事業年度末における計上はありません。

(2) 賞与引当金

従業員賞与の支払に備えるため、将来の支給見込額のうち当事業年度の負担額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

4 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(2) 消費税等の会計処理方法

税抜方式を採用しております。

(表示方法の変更)

貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、有形固定資産等明細表、引当金明細表については、財務諸表等規則第127条第1項に定める様式に基づいて作成しております。

また、財務諸表等規則第127条第2項に掲げる各号の注記については、各号の会社計算規則に掲げる事項の注記に変更しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
短期金銭債権	25,041千円	117,677千円
短期金銭債務	4,668 "	17,904 "

※2 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
建物	226,663千円	212,525千円
土地	299,581 "	299,581 "
計	526,245千円	512,107千円

担保付債務は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
長期借入金（1年内返済予定の 長期借入金含む）	350,000千円	350,000千円

※3 国庫補助金等により取得した資産につき、取得価額から控除されている圧縮記帳額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
建物	65,740千円	65,740千円
構築物	9,958 "	9,958 "
機械及び装置	34,394 "	34,394 "
工具、器具及び備品	714 "	714 "
計	110,808千円	110,808千円

※4 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行4行と当座貸越契約を締結しております。契約に基づく当事業年度末の借入金未実行残高等は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
当座貸越極度額	1,500,000千円	2,700,000千円
借入金未実行残高	580,000 "	580,000 "
差引額	920,000千円	2,120,000千円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年2月1日 至 2018年1月31日)	当事業年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
営業取引(収入分)	73,955千円	164,065千円
営業取引(支出分)	45,540 "	103,661 "
営業取引以外の取引(収入分)	1,559 "	641 "

※2 販売費及び一般管理費の主なもののうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年2月1日 至 2018年1月31日)	当事業年度 (自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)
荷造運賃費	146,585千円	141,986千円
給与手当	224,387 "	212,259 "
賞与引当金繰入額	19,179 "	17,790 "
役員報酬	123,447 "	141,869 "
退職給付費用	9,742 "	9,824 "
研究開発費	302,414 "	408,913 "
減価償却費	7,353 "	9,626 "
おおよその割合		
販売費	32%	30%
一般管理費	68 "	70 "

(有価証券関係)

1 子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

(単位：千円)

区分	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
子会社株式	38,008	373,328
関連会社株式	867,937	867,937
計	905,945	1,241,266

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産の発生の主な原因別の内訳

(繰延税金資産)

	前事業年度 (2018年1月31日)	当事業年度 (2019年1月31日)
(1) 流動資産		
賞与引当金	21,395千円	21,752千円
たな卸資産評価損	14,392 "	20,569 "
法人事業税	17,032 "	20,761 "
その他	4,700 "	3,943 "
小計	57,520千円	67,027千円
評価性引当額	△14,392 "	△20,569 "
合計	43,128千円	46,457千円
(2) 固定資産		
投資有価証券評価損	1,284千円	2,609千円
退職給付引当金	13,959 "	16,023 "
小計	15,243千円	18,633千円
評価性引当額	△1,284 "	△2,609 "
合計	13,959千円	16,023千円
繰延税金資産合計	57,087千円	62,481千円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

前事業年度及び当事業年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却 累計額
有形固定資産	建物	1,705,437	693,727	11,378	108,059	2,387,786	807,209
	構築物	162,547	17,957	—	10,511	180,504	109,266
	機械及び装置	1,601,478	294,121	24,201	168,914	1,871,399	1,013,479
	車両運搬具	5,806	—	219	607	5,587	5,485
	工具、器具及び備品	1,525,159	275,244	61,650	188,697	1,738,753	1,186,029
	土地	608,641	—	—	—	608,641	—
	リース資産	7,890	31,356	—	3,492	39,246	8,336
	建設仮勘定	680,475	182,179	629,075	—	233,579	—
	計	6,297,436	1,494,586	726,524	480,282	7,065,499	3,129,807
無形固定資産	ソフトウェア	51,313	5,589	—	3,344	56,903	44,136
	その他	36,298	22,465	—	128	58,764	1,318
	計	87,612	28,054	—	3,472	115,667	45,455

(注) 1. 「当期首残高」及び「当期末残高」は取得原価により記載しております。

2. 当期増加額のうち主なものは次のとおりであります。

建物	本社	上野原第二工場新棟建設	675,333千円
機械及び装置	本社	合成装置等	287,684 "
工具、器具及び備品	本社	製品出荷用容器	213,025 "
建設仮勘定	本社	合成装置等	127,403 "

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
賞与引当金	61,419	62,919	61,419	—	62,919

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	2月1日から1月31日まで
定時株主総会	毎事業年度終了後3ヶ月以内
基準日	1月31日
剰余金の配当の基準日	7月31日 1月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当会社の公告は、電子公告により行う。 やむをえない事由により、電子公告によることができない場合は、日本経済新聞に掲載する方法により行う。 なお、電子公告は当会社のホームページに掲載しており、そのアドレスは、次のとおりです。 http://www.trichemical.com
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができないものと定款で定められております。

1. 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
2. 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
3. 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
4. 株式取扱規則に定める単元未満株式の買い増しを請求する権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

該当事項はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第40期(自 2017年2月1日 至 2018年1月31日)

2018年4月27日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年4月27日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

第41期第1四半期(自 2018年2月1日 至 2018年4月30日)

2018年6月14日関東財務局長に提出

第41期第2四半期(自 2018年5月1日 至 2018年7月31日)

2018年9月14日関東財務局長に提出

第41期第3四半期(自 2018年8月1日 至 2018年10月31日)

2018年12月14日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書

2018年5月7日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号(特定子会社の異動)の規定に基づく臨時報告書

2018年8月16日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号(主要株主の異動)の規定に基づく臨時報告書

2018年10月24日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号(主要株主の異動)の規定に基づく臨時報告書

2018年12月11日関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年4月26日

株式会社 トリケミカル研究所
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 渡邊 力 夫 ⑩
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 伊藤 正 広 ⑩
業務執行社員

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社トリケミカル研究所の2018年2月1日から2019年1月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社トリケミカル研究所及び連結子会社の2019年1月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社トリケミカル研究所の2019年1月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社トリケミカル研究所が2019年1月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年4月26日

株式会社 トリケミカル研究所
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 渡邊 力 夫 ⑩
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 伊藤 正 広 ⑩
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社トリケミカル研究所の2018年2月1日から2019年1月31日までの第41期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社トリケミカル研究所の2019年1月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- ※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年4月26日

【会社名】 株式会社トリケミカル研究所

【英訳名】 Tri Chemical Laboratories Inc.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 太 附 聖

【最高財務責任者の役職氏名】 専務取締役 菅 原 久 勝

【本店の所在の場所】 山梨県上野原市上野原8154番地217

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長太附聖及び専務取締役菅原久勝は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年1月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制(全社的な内部統制)の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しております。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、会社及び持分法適用関連会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。なお、連結子会社1社及び持分法適用関連会社1社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の当連結会計年度の売上高(連結会社間取引消去後)の金額が高い拠点から合算していき、当連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している2事業拠点を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及び棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年4月26日
【会社名】	株式会社トリケミカル研究所
【英訳名】	Tri Chemical Laboratories Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 太 附 聖
【最高財務責任者の役職氏名】	専務取締役 菅 原 久 勝
【本店の所在の場所】	山梨県上野原市上野原8154番地217
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長太附聖及び専務取締役菅原久勝は、当社の第41期(自 2018年2月1日 至 2019年1月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。